

布教資料第3集

御法語に学ぶ

- | | |
|------------------|--------|
| ○ 御法語に学ぶ | 藤吉慈海台下 |
| ○ 今何を語ろうとされているのか | 大室了皓 |
| ○ 学問と修行 | 大橋俊雄 |
| ○ 『徒然草』と法然上人 | 寺内大吉 |
| ○ 法然上人と御法語 | 三枝樹隆善 |

浄土宗布教研究所



布教資料第3集

御法語に学ぶ

目次

御法語に学ぶ	藤吉慈海台下 (1)
今、何を語ろうとされているのか	大室 了皓 (23)
学問と修行	大橋 俊雄 (53)
『徒然草』と法然上人	寺内 大吉 (75)
法然上人と御法語	三枝樹 隆善 (93)
あとがき	(113)

浄土宗布教研究所

御
法
語
に
学
ぶ

藤吉慈海台下

皆さんは、浄土宗の御布教に熱心な方々で、二十一世紀の浄土宗の布教を背負って立たなければならぬ方だと思いますが、浄土宗の教えというものが二十一世紀に向かって、あるいは宇宙時代に入った今日、適当な教えであるかどうか、あるいは二十一世紀に未来を開く人類の宗教として自信を持って伝道できるかということ深く反省をしなくてはならないということが、まず大事なことであります。ただ伝統的に昔から言ってきたことを、従来の教えを繰り返していきさえすればよいというような安易な愛宗護法の精神というものを深く反省しなければならぬと思っておるのでございます。また、男子として生れてきて、私自身が生涯を過ごす上において、浄土宗の教え、法然上人の御教えというもの、二十一世紀に向かって進みつつある人類の未来を開く教えであるかどうか。そのために自分の生涯を捧げて悔いのない生活を送ることができかどうかということをまず反省しなければならぬと思っております。そして、そこに使命感を本当に感ずることができるならば、法然上人が申されたとおり、「浄土宗の学者は、身、命、財を投げ打っても浄土の法を説くべし」と仰せられたことに向かって、われわれが深く反省をし、身・命・財を捧げてもいいというような使命感を持つべきであると思っております。それで、愛宗護法ということもおそらく皆様方はお持ちになっておると思っております

が、どうかしますと、ただ愛宗護法という立派な言葉にだまされてしまって、自分のほんとうの信仰とか信念とかというものを、あるいは深く反省しないで、ただ旧来の伝統を守るといふことが、そのまま愛宗護法の伝だといふふうに思い込んでしまう。何らの反省なしに、ただ昔から言い伝えておるようなことを、どんなに上手に、また、感激深く伝えるかということが、布教伝道であるといふふうに考えたりする。そのことをもういっぺん反省してみなければならぬと思うのです。私自身も浄土宗のお寺に生れて、浄土宗の教えというものは、人間をほんとうに新しく導いていく教えであろうかという反省からずっと眺めてきておりました。それは未熟な考えであつたかもしれませんが、常にそういうふうな考えを比較的自由な立場から持つてきて、いまも持つておるつもりでおるわけです。あります。だから、どうかすると、愛宗護法の念がないと思われようなことも言つたり、あるいは行なつたりしてきたのでございます。しかし、私にも浄土宗の一員としての愛宗護法の念というものは、いささかあるように思ひまして、日ごろ考えておりますことを歌に作つたり、あまり本を読めなくなつてきたものですから、人に読んでもらつたり、原稿を書いてもらつたりしておるのであります。思索といつても、あまり深く考える力もございませんが、このごろいろんなことを思つたり、歌を作つたりして、反省みたいな生

活をおくっておるのでございます。いつまでそういう境涯が続くか、もう二、三年でさよならということになるかと自分でも思ったりするのであります。そうしますと、皆さん方をお願いをしておきますことは、法然上人の残された教えを、われわれが法然上人に代わって説かなければならないということです。そうしますと、法然上人が、いまおられたならば、どんなふうにお説きになるであろうかということも深く考えてみなければならぬと思うのです。ただ、法然上人や二祖様、三祖様の教えというものが、こうおっしゃったからそうだというふうにいままで決めておりましたけれども、いろいろ読んだり考えたりしますと、法然上人の教えも正しく伝えられておるのか。あるいはその間に歴史的な展開があつて、文献上でも、法然上人の常に仰せられている御言葉という言葉にしても、あるいは御法語というものでも、その間に、関東と関西では、時代によって違ふのであります。けれども、関東のほうが、どうかすると保守的にといい方はおかしいですけれども、学者たちの意見に従うと、たとえば、義山上人によって、法然上人の言葉とか教えもだいぶん整理されたというふうに言われておるといふふうに思います。少なくとも法然上人の残された御法語が、だれに向かって言われた法語であるかということ、それから法然上人の何歳ぐらいに、その法語をおっしゃったかということ、それから、はたして法

然上人がそういうことをおっしゃったのだろうかということについても、私どもは批判をしなくてはならないと思います。法然上人がおっしゃったから正しいとは言えない。あるいは、そのほんとうの意味はどういう意味であるかということを考えてみなくてはならないと思うのでございます。たとえば、私が、この本山に来て、晋山式のときに申したのですが、禅勝房に法然上人がおっしゃったという法語の「念仏に倦き人は、無量の宝を失うべき人なり。念仏にいさみある人は、無辺の悟りを開くべき人なり」という言葉は、望月先生の編纂された『法然上人全集』の中には、載っておらないんです。私もそういう言葉があるのを知らなかった。ところが、『昭和新修法然上人全集』という厚い本を、石井教道先生が、お出しになったのを読んだみたら、十二問答の中に、禅勝房の質問に対して、今の御法語が書いてあるんです。法然上人は、悟るといふことはあまり言われなかったけれども、「一枚起請文」の中にも、「念の心を悟りて申す念仏にもあらず」と「悟る」とおっしゃっている。そして、禅勝房に対しては、「念仏にいさみある人は、無辺の悟りを開く」と仰せられている。亡くなられた香月先生は、それは知らなかったとおっしゃったのです。法然上人に、そういう言葉があることを知らなかった。だれも知るはずはないのです。望月先生が編纂され浄土宗の各寺院に普及していた『法然上人全集』の中では、

その法語は省かれています。ところが、石井教道先生が編纂された『昭和新修法然上人全集』には、その法語はちゃんと載っているのです。それ、法然上人だって、「念仏にいさみある人は、無辺の悟りを開くべき人なり」とおっしゃっている。なるほど、そうかなあ、それは藤吉さんが好きな言葉だなあと大笑いしたんです。ここの晋山式のときにも、それを言うたら、花園大学の先生が聞いて、「全く座禅と同じようなことを法然上人は、言っている。念仏によって悟りが開けると言ってるんですか。禅宗とちっとも違わんですね」と言うんです。

それから、『選択集』の中に法然上人が念仏は王三昧であるということをお書きになっておるんですけども、浄土宗の専門の先生が、ほとんどそれに気づいてないんです。そういうことがあることを忘れておるんです。ここに来てから、私が言ったら、王三昧というのは、どっかで見ることがあるけれども、まさか『選択集』に王三昧という言葉があることに気付かないでいるんです。曹洞宗の僧堂によく王三昧と書かれた額がかかってます。だから道元禅師の一手販売のように思っていたらいいのですけれども、ちゃんと、しかも『選択集』の中に、念仏は王三昧であると仰せられています。ところが浄土宗の人は、ほとんど王三昧ということを知らなかったんです。自分の宗祖が『選択集』の中に書

いておられることをほとんど注意しておらない。それから、善導大師は、法然上人と全く同じような専修念仏ということを言われた人だというふうには、皆、思ってるけれども、その善導大師の六時礼讃の中に、「摂心常在禅」、即ち「心をおさめて常に禅にあれ。」とうたっていらっしやる。「心をおさめて常に禅にあれ」ということは、専修念仏から言うのと、全く逆のことのような気がします。そこを善導大師が、「心をおさめて常に禅にあれ。」と六時礼讃の中でうたっておられたんです。浄土宗の人々も六時礼讃はうたっているのですけれども、ほとんど注意していないのです。「心をおさめて常に禅にあれ」と善導大師は自分でうたっておられたのです。その言葉を見ると、もっぱら念仏を唱えることを勧められた善導大師は一面において、「心をおさめて常に禅にあれ」という言葉を残しておられたということが不思議に思えるくらいですが、念仏を唱えられていた善導大師は、同時に、常に心をおさめて禅にあるようにつとめなくてはならないと、自分に言い聞かしておられたのかもしれないと思うのです。「摂心常在禅」という言葉を法然上人は、あまり強調しておられませんが、六時礼讃の中にありますし、皆様方も、お読みにならなければならないけれども、ほとんど注意しておられないと思います。私が、気付いたことは、そのくらいです。そのことを申しましたら、どなたかが、法然上人がそんなことを言われるはずは

ない。私の持つてる『法然上人全集』の十二問答の中には、「念仏にいさみある人は無辺の悟りを開く」なんて御法語は載っておらない。それは嘘だろうということを書いてきた。私は『昭和新修法然上人全集』の十二問答をごらんなさいと申しました。そして、どなたかが、『勅修御伝四十八巻伝』の中の四十五巻に法然上人の言葉がたくさん載せてある、その中にちゃんとその言葉が載っていると教えて下さった。私も勅修御伝はどうせ信用されなれないと思って、その当時、あまり読まなかったのです。禅勝房に言われた言葉がちゃんと法然上人の言葉として四十五巻にも載っていたのです。勅修御伝というものは、法然上人が亡くなってから百年目ぐらいにできた本です。ちょうど同じ時代にできた本に『徒然草』というものがあります。中学生のころに読んだのですが、私は、いっぺん全部読みました。その中に法然上人の言葉が載ってるんです。言葉は忘れましたがけれども、「眠たくなったらどうするかという、目がさめてから念仏申しなさい」という有名な御法語と一緒に、「疑いながらも念仏すれば往生す」と、法然上人が仰せられたという言葉があるので、びっくりいたしました。法然上人は、信ぜよ、信ぜよと言われたのに、疑いながらも念仏すれば往生すると仰せられたのは、いかにもありがたいと兼好法師は書いてらっしゃるんです。ところが、疑いながらも念仏すれば往生するという言葉は、浄土宗の法

然上人の言葉としては、いつの間にか省かれたんだろうと思います。「信じてもお信ずべきは必得往生の文なり」という、信仰ばかり強調する教えの中で、「疑いながらも念仏すれば往生す」と言われたということは、どうも具合が悪いので、省いたんだろうと思います。しかし、ちょうど滅後百年ぐらいに勅修御伝四十八巻伝ができたと同じころに、法然上人の言葉として兼好法師がちゃんと『徒然草』の中に書いておられる。ほかの法語は法然上人の法語の中に載っておりますからして、やっぱり兼好法師は、それを法然上人の言葉として聞いて、それが尊いと言われた。なぜ尊いと言われたか、兼好法師が、「疑いながらも念仏すれば往生す」と仰せらるるのがいかにもありがたいとなぜ感ぜられたのかと、われわれは考えてみなくてはならない。やっぱり人間は、私は「五重相伝」でもそういうことを申し上げましたけれども、それを聞いて同行たちは、安心したという人はあるんです。やっぱり疑い心というものは、人間には最後までなくならないんじゃないか。あなた方がどんなに上手に信仰をお説きになっても、信ぜよ、信ぜよと言っても信じがたき「難信の法」とお経の中に書いてある。お経の中に書いてあるから正しいというわけじゃないけれども、人間にとって信ずるということは、とてもむずかしい。親鸞上人のような信仰の強い方でも、「弥陀の誓願、不思議に助けられまいらせず」と言われたんです。不

思議に助けられまいらず。蓮台に乗らんまでは、この思いは抜けないだろうと、法然上人は、いつかおっしゃったらしいです。そうすると生きている間は、人間というものはやっぱり疑い心というものをどこかに持つ、それが人間の弱さです。だから親鸞上人でも、法然上人でも、地獄は一応住家ぞかしと言われたり、疑惑の法然坊、無知の法然坊と言われたのは、オーバーな表現ではないんです。よく考えてみれば、やっぱり蓮台に乗らんまでは、疑い心というものが、立ち去らない、なくならないものだということ、法然上人でもお感じになっていたのではないかと思えます。疑いながらも念仏すれば往生とおっしゃったということは、おそらくほんとうにおっしゃったのだらうと思えますけれど、浄土宗では伝道の教義の中には、伝わっておりません。そういう言葉は布教伝道の上にあまりよくないと思ったんでしょう。信ぜよ、信ぜよと、極楽は実在するというふうに言わなくちゃならないというふうに教えておったんです。疑いながらも念仏すれば往生ということを言うたら、念仏を申さない、念仏の信仰というものを疑ってくるというふうには、あさはかにしか考えなかったんですね。しかし、よく考えてみると、その疑いというもの、やっぱりなかなか取れない。そういう疑い、疑い心があっても、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と申している間にいつの間にか、その疑い心が解けて、そうして念仏をする

ようになるということを法然上人は、感ぜられて、凡夫を導くためには、疑い心があってもいい、念仏を申しておれば、次第にその疑い心もなくなっていくということを感じられて、疑いながらも念仏をすることを説かれました。「往生之業念仏為先」、往生の業には念仏を先とすということは、そういう意味です。念仏するということが先だということとは、あとだということに對する先なんです。もっと根本である、大切であるということふうなことは当然のことです。先であるということは、まず、念仏を申せということです。多少の疑い心はあっても、まず念仏を申せということです。それが念仏為先ということの意味だと私は思います。そこまで法然上人は考えていらっしゃる。それが疑いながらも念仏すれば往生すと仰せられた意味、疑い心があっても、まず南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と念仏を申すことを先にしろという意味じゃないかと私は思います。ところが『浄土宗大辞典』を見てもそういうふうには書いてないです。「念仏為先」と「念仏為本」とはほとんど同じであるというふうに説明してある。為先の先には、後に對するものだということとは、書いてないです。だから、よほど味わってみなくちゃならない。念仏にいきみある人ということでも、いきむということとはどういふことかと皆さん方は考えたかどうか。悟りを開くということも。そこで法然上人はおっしゃってる。おそらく権尾弁匡先生もその御

法語を知らなかったというか、注意しておられないから、いっぺんも椎尾先生の御法語やお話の中に、その言葉は引かれておらないです。おそらく知らなかったのだろうと思います。椎尾弁匠先生は、その本を知っておられれば、念仏によって悟りを開くと法然上人が、もっと力強く仰せられたに違いないと思います。徳川初期の三河の侍で鈴木正三という人がいる。この人は、念仏と禅を両方やった人です。その人も、法然上人のお言葉に「念仏に勇みある人は、無辺の悟りを開く」という言葉があったことを知らなかったんです。それだから、法然上人は、悟るということは言わなかったけれども、法然上人の念仏往生も悟らん悟りなりというふうに言ってるんです。悟るということを言わないで、念仏往生を言われた。悟りということ、禅宗の人はよく言う。鈴木正三さんという人はおもしろい人だと思って、『鈴木正三全集』を全部読んでみました。その中に法然上人に関して古い歌の中に、「悟りとは悟られて悟る悟りなり、悟る悟りは夢の悟りぞ」とある。禅宗でもえらい人は、悟りなんていうものを初めはやかましく言うけれども、あとでは悟りなんていうのは、あまり言わなくなって、擦り切れてなくなってしまふ。悟りとは悟られて悟る悟りなり。悟ったということ、言うてるやつはまだほんとうの悟りに引掛かっている。ほんとうの悟りというのは、悟らないで悟るのが悟りだ。悟ろうと思って悟ったな

んていうのは、夢の中での悟りに過ぎないということです。鈴木正三さんはまた「まことに悟る悟りは危ないことぞ。われも悟らん悟りが好きなり。私も悟らん悟りがほんとは好きなんだ。法然などの念仏往生も悟らぬ悟りなり」といつている。法然上人が念仏して往生するとおっしゃったけれども、それは悟らないで悟ったその境地を示したものであると鈴木正三は法然上人の念仏往生をそういうふうには評価してゐるんです。これは鈴木正三が実際に念仏をしたからそういうふうにはわかったんです。ところが法然上人は禅勝房に対して、念仏に勇みある人は、無辺の悟りを開くべき人なりとおっしゃったんです。禅勝房という人はどういう人か、私も知らないけれども、法然上人の弟子の中でおもしろいことを書き残している人だなと思っております。この間、亜細亜大学の梶村先生が来て話をしたんです。熊谷直実の話をしているときに禅勝房の話が出てきたんです。禅勝房はどういう人かというと、浜松の奥のほうの人で始めは天台宗のお坊さんだったんです。森の石松が埋葬されたところと同じところに生れて、そこにお墓があるそうです。熊谷直実の紹介で、法然上人の教えを受けたんだそうです。それもほんとか知らないけれども、そういう話を聞きまして、なるほどそうかと思つたことです。そういう人だから、いろいろ変わった御法語を、私どもが聞きたいようなことをちゃんと聞いて書き残しておってくれてるわ

けです。それで、皆さん方は、おそらく念仏を勧めるということをやさってるではありません。けれども、「念仏に勇みある人は無辺の悟りを開くべき人なり」ということをどういう意味であるかということを考えてみられましたか。「勇みある念仏」というものは、私も喜び勇んでというふうに解釈しておりました。しかし、喜び勇んで念仏するということは、わかったようでわからないです。無辺の悟りとは、またどういうことか。先日、第二期の布教講習会があつて、十四、五名、ここで二週間ほどおりました。その勤行のときに、毎朝私は、この話をしてみました。法然上人は念仏を喜び勇んで申しておれば悟りが開けるといふふうにおっしゃつたと。そしたらある先生が、藤吉先生は、法然上人がたつたいっぺんしか、たった一人の人にしか言わなかつたことをそんなに大切に、あまり言うちやいかない。法然上人がたくさん申されたことはほんとうであつて、いっぺんしか言わなかつたことをそんなに強調してはならないと言つたそうでありますけれども、なるほどそうかとも思います。けれども、いっぺんでもある弟子に向かつて言われたことは、やっぱり言われたことであつて、その意味はどういうことかと、われわれは深く反省してみなくてはならない。そうして念仏を申すということが、道元禅師は、なぜ田んぼの中の蛙のようだというふうに言われたのか、日蓮上人が念仏無間となぜ言われたのかということも

よく考えてみなくてはならない。そうして私は、この間歌を作ったんです。「念仏は悟りを開く道なるを、田んぼの蛙、無間地獄ぞ」と。歌になってないかもしれないけれど、念仏は悟りを開く道であるが、受取り方によっては田んぼの蛙というように受け取った人もあれば、念仏は、唱えておれば無間地獄に陥るといふふうに非難をされた人もある。これは悪口に違いないけれども、そういう悪口はどこから出てくるのか。なぜそういうふう田んぼの蛙と道元禅師は言ったのか。念仏は無間地獄に落ちると、なぜ日蓮上人が言われたのか、ということをはじめ反省してみなければならぬと思います。そのことを皆さん方は反省してみられましたか。それから念仏にいさみあるというのは、喜び勇んで念仏するというふうに、私も言い換えてまいりましたけれども、喜び勇んで念仏するということは、木魚をしっかりとたいて、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と大きな声で言うことであるのかどうか。田んぼの蛙とあまり変わらないような念仏になっしてしまわないか。あるいは無間地獄に落ちるような念仏しか申ししていないのではないか。そういう念仏をわれわれは勧めてはいないかということをよく反省してみなくてはならないと思います。法然上人が申された「念仏に勇みある人は無辺の悟りを開く」ということですが、「無辺の悟り」ということについて、浄土宗の有力な人、老僧あるいは浄土宗の

教えを長く受けてきた人が、「先生はそういうことを言われますけれども、無辺の悟りを開くことはとてもできません。だから、この言葉はあるいは法然上人の言葉ではないでしょう」というふうに解釈した人があるんです。だから私は、無辺の悟りというものは、無常の悟りとは違うんだ。無辺の悟りというものは、いろんなことに気付かされるということだというふうに説明してあげたんです。念仏を唱えることによっていろんなことに気付かされる、つまり念仏を主体的に申すということです。念仏に勇みある人というのは念仏を主体的に、ほんとうに心から味わって、「南無阿弥陀仏」と申される人である。そうすると、いろんなことに気付かされてくるんです。念仏による無辺の悟りは、有辺ではなく、無辺の悟りなのです。無常の悟りとはおっしゃってない。無辺の悟り、いろんなことを教えられるということです。いろんなことが悟らされてくるということです。お釈迦さまでも三十五歳で何もかも悟ってしまったわけではないです。八十歳で亡くなるまでの間の四十五年間というものは、やっぱり心境は変化したに違いないのです。人間である限り、禅宗のお坊さんにしたところで、初めに悟りを開いたてから、実際に八十か九十で亡くなるまでの心境は、だんだんと進んできているというふうに解釈しなければならぬと思います。法然上人だって、四十五歳で浄土宗をお開きになって念仏に接させられたとき

の御法語と、八十近いときの心境というものは変わっていたに違いないのです。だから、その御法語は残っておっても、それはいつごろの言葉であるかということをお私どもは気付かなくてはならないのです。そしてどういふ人に向かつて言われた言葉であるかということをお考えなくてはならないのです。「念仏に勇みある人」ということを、私は、いままで喜び勇んでというふうには言葉を替えていましたけれども、それだけでは無辺の悟りを開くということにならないのです。「いつまでたっても、心を接して常に禅にあれ」と善導大師が自分に言い聞かせられていたということすら、いつも礼讃を唱えているのに気付かないでおるじゃないか。そういう言葉があるのに気付かないでおるのが、浄土宗の坊さんの大部分でしょう。念仏は王三昧であると、王三昧とは何かということをお考えた人もいないんです。なぜ、王三昧であるとおっしゃったのか。念仏について何も考えていない。ただ、昔から念仏を申せというから申してればいいんだろうと思ってるんです。多くの人は「藤吉先生は、悟りは開けると申されるけれども、私は念仏によって悟りを開けない」という。多くの人はタバコをのみ、お酒を飲み、ゴルフをやり、バーに行き、そして念仏を勧めてる。これで布教師だと思ってるんです。それでいいと思ってる。念仏を唱えておればさすがに違う、念仏を申すようになってからさすがに違うというようなものがない

ば、無辺の悟りを開くとおっしゃった法然上人の勇みある念仏を唱えてるとは言えないのですよ。念仏を唱えたって地獄に行くか、極楽に行くか知らないけれども、極楽に行けるだろうと思ってる。そして念仏を唱えてる程度です。どこかありがたいと思ってる。しかし、一般の人からみれば念仏をあれほど勧められるうちの和尚さんは、われわれと何か違うかというと何にも違わない。念仏を申したって、お酒も飲むタバコもむ、バーにも行くしゴルフもやる。どこに違うところがあるか。念仏を申したって、何にも変わりはないじゃないか。愚痴も言うし、欲っぱりなんだ。寺の奥さんにしても念仏を唱えておられるようだけれども、われわれとちっとも違わないと思うであろう。一般の人がやはり念仏を申す人は違う、なるほどあいうふうになるのかと思われるようなものがなければ、いくら念仏を勧めてみたところで、何の役にもたたない。たとえば椎尾弁匡先生が、「時は今、ところはあしもとそのことにうちこむいのちとわのみのち」という、無量寿を見るという椎尾弁匡先生の有名な歌があります。それは有名な歌で、林靈法先生が、今度、『椎尾弁匡先生と共生浄土教』という書物をお書きになって送ってくださったのにもだいぶ書いてございます。その歌を無量寿を見るという題目をつけて、その歌を歌われたんだそうです。無量寿を見るということは、「時は今、ところはあしもとそのことにうちこ

むいのち、とわのみのち」つまり、いま自分がやっていることに一生懸命に自分を忘れて打ち込むこと、わかりやすく言えば、道元禪師の「即今の生」、現在というものに打ち込む、無我になっていく、「即今の生」という生き方が道元禪師の教えの基であるというふうに見られる。それとほとんど同じです。「時は今、ところあしもとそのことにうちこむいのち、とわのみのち」と歌われた。皆、それに感激して、共生浄土教の人たちは、椎尾弁匡先生の残された、非常に尊い歌であるとして、ありがたく思っている。私も、それはりっぱなことであると思えますけれども、その中で念仏とは、一体どういう関係になるのか。その歌は無量寿を、永遠の御命と教えられ、そのときはいまであり、ところは足もとそのことである。すなわち自分のやってることに打ち込む命が永遠の御命だ、永遠の中のいま、即ちいまというものの中に永遠が含まれておる。だから、そのいまという瞬間を生かしていくという生き方に徹底しろということである。「即今の生」に生きよと道元が言ったように、悟ろうと思っても簡単には悟れない。ただ、ただすわるといことがいいのだ。ただ念仏していることがいいのだ。ただ行うということを非常に大切にとらえ、その歌を作っておられる。そこに念仏というものの尊さを見るといってお気持ちであったと思うのであります。

いままで申しましたように、これから先、二十一世紀を導いていかれる皆様方には、法然上人の念仏の御教えを、戦争を起こさない御教えとして説いていただきたいと思えます。浄土宗の「南無阿弥陀仏」と申す念仏の御教えは、国家性とか民族性というものを越えて、普遍的な宗教として最もふさわしいものであると思います。日本人のみならず世界の人類のすべてにとって「南無阿弥陀仏」と念仏するということが、人間の信心の生き方、知恵と慈悲とをそこにいただいていくものであり、簡単に言えば、無辺の悟りを開く御教えであります。こうした生き方は、主体的に念仏するということであるというふうにご皆さんによって説いていただきたい。極楽にまいたいと思っているおばあさんやおじいさんたちに向かって、そんなことばかり説いているわけにはいかないでしょうが、若い人々に向かっては、「南無阿弥陀仏」と申すことによって主体的に自分自身がどう生きていくかということを考えていく。そうして念仏を申せば、ちゃんと自分がいなければならぬことがはっきりしてくる。そのことが無辺の悟りであるというふうを考えて、自分自身が念仏によってどういうことを悟ってきたか、どういうことが自覚できたか、というようなことをこれから先、訴えていかななくてはならない。若い人に向かっても壮年の人に向かっても、だれに向かってでも念仏をすることによって、私自身はどういうこ

とを気付かせられたか、という体験を相手に教えていき、話していくことによって、皆がなるほどと思つて付いてくるようになるだろうと思います。だから、念仏の御教えというものは、二十一世紀に向かって、世界の人類がそういう知恵と慈悲とを体得して、人間のあり方というものを体得するのに最もふさわしいものであると思います。座禅ももちろん大切でありますけれども、座禅というものはどこでもできることはありません。しかしながら善導大師ほどの念仏をした人が、「心をおさめて常に禅にあれ」と、自分自身に言い聞かせておられたということを忘れてはならないと思います。そうしないと現代の浄土宗の布教というものは、大切なものが欠けてしまつて立派な教えではなくなつてしまふ。田んぼの蛙、あるいは無間地獄に落ちるような念仏を教えていると言ふような批判がでないようにしていかなければならない。念仏を申すということは自分自身が主体的にどう変わっていくかということが肝要である。それが「無辺の悟りを開く」ということを仰せられた法然上人の「勇みある念仏」という意味であるということをやよくお考えになつて御布教願いたいと思うのでございます。

今、何を語ろうとされているのか

大室 了 皓

昭和六十三年六月二十日

御法語との出会い

昭和二十年の終戦の年は、ちょうど私が二十歳の時でした。外地に行くことになっておりましたけれども、もう船がなくて行かれなくなつて、仙台の航空隊におりました。航空隊には、飛行機があるわけでして、むこうの艦載機にしばしばねらわれて、しょっちゅう空襲があるんですね。そのたびに私も防空壕に逃げるわけです。ところが、この航空隊は仙台の岩沼というところにあり、海の近くなものですから、防空壕もあまり地下深くは掘れないんです。半地下にしないと水が出てきてしまいます。それで半地下にして、支柱を建てて上に覆いをつくって泥をいっぱい載せておくのですが、入口が地上に出ているわけです。そういう防空壕に空襲のたびに入るわけです。あるときものすごい空襲がありました。二、三十分は続いたと思うようなものすごい空襲で、近くに爆弾が落ちたんですが、その爆風で、私たちの潜んでいる防空壕に草の根っこや葉っぱが飛び込んできて、耳がガンとして、もうこの世の終わりかと思いました。艦載機といっても、グラムンで、ロケット爆弾を落しました。

それまでは、空襲といつてもほんの二、三分ですから、ちょっと避難すればよかつたん

ですが、そのときばかりは私も生きた心地がしませんでした。一般に、坊さんの子供は戦地に行くときには父親にお経の豆本かなんかを持たされたようでした、私も『法語抄』というものを持っていきました。藤井実應下が、亡くなられた佐藤賢順先生と、法然上人讃仰会で、昭和十五年にお出しになった本なんです、その小さい本をポケットに入れておきまして、演習中もずっと持っていました。そして、この世の最後かと思うようなものすごい空襲のときにも『法語抄』を出して読んでいたわけです。そうしましたら、だんだん心が落ちついてきたんですね。

そのうち、コトコトコトコト、音が聞こえてきたんです。ひょっと見ましたら、防空壕の中の支柱に軍刀が当たって、これが音を立てていたわけです。なんで音がしているのかと思いましたら、陸軍少尉の小隊長が――演習のときなどはやたらにビンタをする鬼みたいな人なんです、支柱につかまって震えているんです。恐くて、震えているから軍刀がカタカタ鳴っているんです。ほかの人もみんな震えていて、私の足をつかんでいる人もいました。でも、私はそのときまことに冷静なんです。どこを読んでいたのか記憶は定かではありませんけれども、とにかく自分でびっくりするぐらい冷静だったんですね。それが御法語との最初の出会いでした。お念仏の教えというのは本当にありがたいものだ

思いました。

私は寺に育ちましたので、お施餓鬼だとか、お通夜だとか、お葬式のときは先代についていて、もっともらしくお経をあげていましたが、今から考えれば信仰を持っていただけではなくて、ただお経をあげてこいと言われたからお経をあげただけで、もっともらしいことをしゃべったりしていただけなんです。でも、そのときの御法語との出会いを通して、法然上人のお念仏の教えは本当に素晴らしいものだと思ってきました。この世の最後かと思うときに心が落ちついていて、安心立命というような、まだわずか二十歳ですが、そういう気持ちにさせていただくことができました。これは私にとっては驚きでありました。また同時に、私は本当に幸せだったと思います。それがなかったらどうなったんだろうと考えますと……。

私は学校に三十三年間勤めまして、昭和五十五年にやめ、かねてから念願でありました『法語抄』をつくらせていただきたいと思っただけでできたのが、この『浄土への道・法然上人法語抄』でございます。

法然上人のお念仏というのはどうなんだろうかという、従来の教えからみるとコペル

今、何を語ろうとされているのか

ニクスの転換をしたものだとは私はこう理解しているんです。

今までは戒定慧というものをしっかり身につけて称えるお念仏が尊いんだと、こういうふうにご教えられていたわけです。皆さんご承知かと思えますけれども、恵心僧都も若干こういうお考えであったわけですね。それでは、戒定慧の三学を身につけるといふことはだれにもできるのだろうか。これは凡人ができることではないということで、法然上人はお念仏が土台になって戒定慧が身につけてくるという、コペルニクスの転換をされたと、私は理解をするわけです。まずお念仏を称えることが大事である、戒定慧はあとでよろしいと。「われ戒定慧の三学の器にあらず」とおっしゃっていますが、これは置いておいていい、まずお念仏を称えなさいと。念仏を称えれば戒定慧というものも身につけていくことができるようになります、これが法然上人のお念仏だと私は思うわけでございます。

仏に救われるためには、至誠心、深心、回向発願心、即ち三心を心得なければいけないということはいつも説かれるところでございます。深心という言葉を二番目に置いておりますが、自分は罪悪生死の凡夫なんだと、いわばダメ人間であるということ、人間の屑だということでございますよね、その認識をしっかりとすることですね。罪悪生死の

凡夫であるということ、そういうどうしようもない人間だから、仏さまの本願に乗じて、仏さましか助けにくださる方はないということ深く深く信じなさいということなんです。

ところが、これはとても難しいことだと思っんですよ。罪悪生死の凡夫、おれはダメ人間だということをちゃんと自覚しろということなんです、自分では、「私などは学問があるといってもちよつと知っているだけでして、ろくな人間ではございません」などと、気楽に人には言いますね。でも、「おまえは本当にばかだね」「おまえは全く人間の屑だ」と言われたとしますと、「まったくそうです」と素直に答えられるかというと、そういうふうには答えられる方も少なくはないと思いますけれども、私には絶対できないですね。「おまえは何だ、寺の住職のくせに人間の屑だ」とか言われたときに、ふざけるんじゃない、あなたにそんなことを言われる筋はないといって怒るだろうと思っんです。でも、怒ったらだめなんです。怒ったら罪悪生死の凡夫であるという自覚をしてないということになるんです。ですから、これはものすごく難しいことですね。それでは救われないと法然上人はおっしゃるんです。

だけでも、法然上人はそんな難しいことをおっしゃるわけがないんですね。凡夫往生、

凡入報土でございますから、悪人正機なんですから、そんな難しいことをおっしゃるわけがないんです。まずはとにかくの念仏しなさいと。有名な話があります。天野四郎という大泥棒が法然上人の庵にしのび込んでひとつ悪いことをやろうと思っていたんですが、法然上人のお説教を聞いているうちに心が変わってきて、「和尚さま、私のような者でも仏さまに救っていただけませんか」と聞きましたら、法然上人いわく「私だって救っていただけるんだから、おまえが救われたいはずはないよ」とおっしゃったんですね。それで天野四郎は深く感激したというんですけれども、法然上人は大泥棒よりもっと極重悪人だとして自分で自覚をされていたわけですね。

しかし、今申し上げたように、おまえはだめ人間だ、屑だと言われてかっときたんです。だめだというような難しいことは法然上人はおっしゃるわけがない、悪人正機の教えです。から、私はこういうふうには理解するんですね。人に、お前は屑だと言われたときに、本当にそのとおりです。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と言えない人間だ、どうしても私はそこまでできない人間だという自覚、そういう自覚をし、悩みを持つ、そういう自覚をしたときが第一歩だと思っんですね。これはそんなに難しいことじゃないんですね。私が「だめ人間だ」「ばかやろう」と言われたときはつい腹が立ってしまっ。まったくあなたのおっ

しゃるとおりだと本当に素直に言うことができない。本当に愚かな者であるという、そういう自覚、認識はできるわけです。それがお念仏で救われる第一歩で、そういう人に仏さまは救いの第一手を延ばしてくださるのではないか、そういうふうを考えるわけです。

それでは、それからどうなるんだということですが、『十二問答』の中に御法語がございますね。「念仏にももうき人は、無量の宝を失うべき人なり。念仏にいさみある人は、無辺の悟りを開くべき人なり。相かまえて願往生の心にて念仏を相続すべきなり」とお説きになっておられます。この御法語は『法然上人全集』にございまして、あの本をずっと読ませていただきましたけれども、法然上人のお言葉で「悟り」というのはこの御法語だけしか出ていないと思うんです。ほかには幾ら探してもないんですね。「念仏にいさみある人は、無辺の悟りを開くべき人なり」というのはどういふことかという、先ほど申し上げましたけれども、まずお念仏を称えなさいということなんです。そうすれば一度にはいかなければいけません、一歩ずつ戒定慧の三つを身につけることができます。そこに人格の転換と申しますか、人格の向上と申しますか、そういうことができるのが念仏であると私は受け取っていると申し上げましたが、まさにこの御法語を読みますと、お念仏を称えて

いるうちにだんだん人格が高められてまいりまして、おまえは人間の屑だと言われても念仏を積んでいるうちに、戒定慧というものが身につけてきて「仰せのとおりです」と心から信ずることができる。つまり、三心の深心を本当に身につけることができるんだと思うんです。

お念仏を称えるということは、法然上人もおっしゃっていますが、みずからの仕事だということなんです。お念仏を称えることも弥陀の本願によって称えさせていただくんだという人がいらっしやいますけれども、御法語にはそう言ってないんです。念仏を称えるのはみずからの仕事であると言っております。そして、往生は仏さまがしてくださいるのでと。『三心料簡及び御法語』というところにこれは書いてあります。お念仏を自分の力で称えていると、「往生は仏の所作なり」ですから、戒定慧の三学を身につけることができます。だから、おまえはだめ人間だと言われてもそのとおりでずと言えるようになる。それは仏さまがしてくださいるんだ。お念仏を重ねているとだんだん人格が高揚して仏さまがそのようにしてくださいるのです。ですから、「念仏にいさみある人は無辺の悟りを開くべき人なり」というお言葉がそこで出てくるのではなからうかと思うのです。

次に、私はお念仏の教えというのは開き直りの教えではなからうかと思うのです。夫婦喧嘩をして、おまえはとんでもない女だと家内に言って、その結果、どうにでもしてください、出て行きますと開き直られたんでは、けんかは負けですね。開き直るといのはものすごく強いことですね。「われは烏帽子もきざる男なり」という御法語は、まさに開き直りのお考えだと私は思うのです。皆さんもよく知っていらっしやる御法語でございますけれども、「われは烏帽子もきぬ法然房なり。黒白をも知らざる童子のごとく、是非も知らざる無知の者なり。ただ念仏往生を仰いで信ず」とございます。

私の後輩が東京のある医科大学の教授をしております。その大学では教授に空席があるので新しい人を入れるというので少し黒い霧がかかったという事件がございました。新聞にもだいぶ報道されて、私の友人も顔写真が出たんです。でも、彼はただその周辺にいたというだけで、まったくそういうことはしてなかったのです。その彼が訪ねてきたんですね。冬でございましたけれども、黒メガネをかけてマスクをして来たんです。「なんだその格好は」と言ったら、「新聞に顔が出てしまったので、道を歩いていても、○○教授はいったと、バレやしないかと思って恐くてしょうがないので、黒メガネをかけてマスクをしているんだ」というんです。それを聞きまして私は、顔写真が出たからといってだれ

も顔なんか覚えてないよ。新聞の写真なんて本当に小さいものでしょう、そんなものをまじめに見ている人はいない。親戚かなんかは見ているかもわからないけれども、似た人はたくさんいるから」と、いいました。でも、真剣なんですネ。

国立大学の教授というのは権力があるんですね。だから、あなたは学があって、権力があって、そういうものにかじりついているから黒メガネにマスクになるんだろう。そんなものは塵芥のごときものである。法然上人の御法語を見てごらんさい。「えぼしもきざる男なり」とある。そういう気持ちになってみたらどうだ。すべて捨て去ってごらんさい。おれはだめ人間だけれども、世間の人もみんなだめ人間だと思って開き直りなさいよ。と、そんな話を一時間ばかりしましたら、開き直ってしまえばいいんだということ。で、帰りは黒メガネとマスクをとって帰りました。あとになって、その気になってしまおうと堂々と開き直れましたという手紙がきましたけれども、こんな楽なことはないですね。地位がある、名誉がある、または、寺の住職だから少し気のきいたことをしなきゃならないんだか思っているようでは、罪悪生死の凡夫であるという自覚にまだ至っていない。自覚すれば何も恐いものはない。かといって悪いことをしたら罪になりますからね。そういう意味では、法然上人は開き直っておられたんじゃないかなと思うわけです。

結婚式などにまいりますと、披露宴でお祝辞をなさる方がいらして、なかには、若い二人に、「きょうはおまえたちは有頂天になって楽しそうな顔をしているけれども、この世の中は楽しいことは少なく、苦しいことが多いんだよ、そのことをよく肝に命じておけ」なんていうご挨拶をされる方がございます。この世は楽しいこともあるけれども、苦しいこともある、あざなえる縄のごとくこうなると。それで、法然上人はどういうふうにお考えになったのかというと、佐々木四郎高綱という方に示された御詞に「みな人のおのれとおのが知恵に迷いて、近き極楽を遠くし、かほどやすき世間を、苦しみとなすことは浅ましきことなり。何なる楽しみかありてこの夢の世に、夢のごとくの知恵をふるまいけるぞ」とおっしゃっているんですね。「かほどやすき世間を、苦しみとなすことは浅ましきことなり」という、そのお言葉によりますと、法然上人は、世の中は楽しいこともあり、苦しいこともある。苦しいことが多いとか言うんじゃないくて、この世の中は楽しくあるべきところなのに、それを苦しい苦しいと言うのはまだおまえの知恵が足りないからだとおっしゃっているように私は受け取るんですね。法然上人は、苦しいと言っていることを、角度を変えて考えれば、それは楽しいことであるはずだとおっしゃっているのです。

いつでしたかお寺にお参りにきたお婆ちゃんが、きょうはひどい目に遭ったと言っています。そのお婆ちゃんは松戸のほうに住んでいらっしゃるんですね。このごろ東京の檀家というのは遠くなりましたからね。それで、家を出て駅に行きまして、切符を買おうと思っただけを忘れたら、お布施を忘れたことに気がついたのです。夏でしたが、十五分ぐらいかかるでしょう、また、暑いところを戻ったと言っていますね。嫁に包んでおいてよと言ったのに嫁が渡すのを忘れたから、私もつい忘れちゃって、嫁と喧嘩して出てきたと言っています。それはそうですね、暑いところを十五分もかけて駅まで出てきたのを戻って、また来るわけですから大変なことです。

そこで、私は、「あなた、いい年をしてどうかしているんじゃないか、そういうふうに見えるから世の中が苦しくなるんですよ。考え方のスイッチをパチッと切り替えてもらいなさい」と言ったんです。「どういうふうに切り替えたらいいんですか」と。「大体、家の中でテレビを見ていたりして、外を歩くことなんかないでしょう」と言ったら、「あんまり歩くことはない」と言っていますね。「きっと死んだおじいちゃんが、『おまえ少し歩かなきゃだめだよ。』ということ、歩かせてくださったのかもわからない。そう思ったら嫁を怒ることもないでしょう」と言っています。

「あ、そうだと思って家に帰ってお嫁さんに、『私は年をとって本当にボケてしょうがないね、忘れちゃった。』と言え、『お母さん、私が渡すのを忘れてごめんさい。』と言って、にこにこして送り出してくれるだろうから、喧嘩することもない。そして、おじいさんがもう少し歩きなさいと歩かせてくださったのかもしれない、そう考えたらどうなんだ」と言ったら、「ああ、なるほど、そんなことってあるんですか」と言うから、「あるんだよ、それが、知恵をめぐらすと苦しいことも楽しいことになってくるということだよ」。「かほどやすき世間を、苦しみとなすことは浅ましきことなり」ということですね。

ですから、法然上人はこの世の中は楽しいところであり、楽しくなければならぬと、そういう考えで物事の転換をして、苦しいと思ったことがあったならば、それは自分の知恵がないからだ、それをぐるっと変えろとかえって楽しいところなんだと。そう思うことができないければお念仏を称える資格はないと、私はそういうふうにおっしゃっているじゃないかと思うわけでございます。「みな人のおのれとおのが知恵に迷いて、近き極楽を遠くし、かほどやすき世間を、苦しみとなすことは浅ましきことなり」。私だつて、この世の中は楽しいことばかりだとは思えません。しかし、困難にぶつかりますと、この御法語を思い出すんですね。なんておまえはばかなんだ、お前は知恵がないからだ

おっしゃっている。そこで考え方を変えていきますと、一〇〇パーセント苦しいと思っていたのが半分ぐらいになりまして、ずいぶん気が楽になるものでございます。

次に資料によって、平均年齢を見ますと、江戸時代は三十五歳。江戸時代といっても長うございますから、中期のところですが。大正時代が四十三歳。今、女性の方は八十で、男性はちょっとまだ足りませんが、大体八十でしょう。それで、今、お年寄りが集まったときが一番の話題はボケたくないということで、一番心配なことなんだそうですね。老人会でもなんでもそういうことが話題の中心になるそうです。だけれども、年をとればみんながボケるというわけではありません。約六%弱ですから、百人のうち五人かそこらですから、全部がボケるわけじゃありませんけれども、ボケる人を身近に知っておりますと……。

皆さんの中にも、そういうおじいちゃん、おばあちゃんのお世話をなさった方もいらっしゃるかと思います。私も身近に知っておりますが、これは本当に大変ですね。床の間とトイレを間違えちゃったり、何でも食べちゃうんですから、想像を絶するわけです。こういうボケ老人が出たら、普通のサラリーマンの家庭は崩壊するかもわからないですね。お檀家の方々のおうちでそういう実例は知っていらっしやると思うんですが、檀家の人たち

でもボケたくないと言っています。では、どうしたらボケないで済むかというと、これは方法がないんですね。手仕事をやったり、指先を使いなさいと。うちの檀家に言いましたら、一所懸命に三味線をやって、夜中でもビンビンやっているんですね。だから、ただ指先を動かしたってだめですよ。庭いじりはどうでしょうか。あんなものはだめですよ。ボケているからとんでもないことをやっちゃいます。葉だっいいいものはないんです。

どうしたらボケないだろうか。「大胡の太郎実秀へつかはす御返事」という御本がございます。百九十一番に載せておりますが、「まめやかに往生の志ありて 弥陀の本願を疑わずして念仏を申さん人は、臨終の悪きことは候まじきなり。その故は、仏の来迎し給うことは、もとより行者の臨終正念のためにて候なり」。善導大師のお書きになった発願文ですが、「願わくは、人々よ命終わるときに臨んで、心転倒せず心錯乱せず心失念せず、身も心にも、もろもろの苦痛なく、身も心も安楽にて禅定に在るがごとく」。これは唐の時代に善導大師がお書きになったわけですが、こういう状態で、命を終わるときに臨んで、心も乱れないでというのがボケないということなんです。善導大師もそういうことを考えていらしたかどうかはわかりませんが、私はお考えになっていたんではなからうかと思うんです。昔だったまにはボケる人もいたでしょう。「命終わるときに臨ん

で、心転倒せず心錯乱せず心失念せず 身も心にも諸々の苦痛なく 身も心も安樂にして 禅定に在るがごとく、これはまさに正念往生ですね。ボケ老人の最後は錯乱往生です。法然上人は御法語に念仏を申せば仏が来迎してくださる、もとより行者の念仏を称える人の臨終正念、正念往生のためなんです。ですから、お念仏を称えていれば必ず正念往生ができるんだよと。今の言葉で解釈いたしますと、必ずできるんだという教えだと思いません。

けれども、法然上人はこういうことも言っていらっしゃるわけです。常に仰せられているお言葉で、百九十八番に載せておきましたけれども、「念仏申さん者十人あらんに たとえ九人は臨終あしくして、往生せずとも、われ一人は決定して往生すべしと思うべし」。お念仏を称えればボケないよと。お念仏を称えているあそこの和尚さんだってボケているじゃないかという人が九人いても、私一人だけは絶対大丈夫なんだと思いなさいというんです。深く信ずべしというのはそのことですな。

それはどういふことか、私なりに法然上人のお気持ちを想像するのでありますけれども、寺の住職だからお念仏を称えているといっても、本当にお念仏を称えていたかどうかわからないんですよ。三心をそなえて念仏に励んだかどうか。お念仏をしているような顔

をしている者はたくさんいるが、本当のお念仏はやっていない。だから、十人のうち九人はボケてしまつてろくな往生はできない、立派な最後はできないのだ。しかし、自分は大丈夫だと思ひなさい、そしてお念仏に励みなさいと、こういうふうにおっしゃっているんだと私は思っているんです。私は、檀家の人に、ボケたくなかつたらお念仏を称えなさい。法然上人がおっしゃったじゃないかと。だけど、うちのお姑さんは一所懸命お念仏を称えたけれどもボケちゃつたと。それはおばあさんがろくなお念仏を称えてなかつたんだと。それで、御法語などを紹介しまして、お念仏を称えていたら絶対にボケないと固く信じて、道を歩くときにも何をするときにもお念仏を称えなさいと言っているんです。今はもう高齢社会ですが、そういう高齢社会に生きる人たちに大きな希望を与える大切な御法語だと思っております。

ご存じかもしれませんが、法然上人はこうおっしゃつたよということを代々伝えていらしたということで、聖問上人伝承の詞というものがございます。「浄土を願う行人は、病患を得て、偏えにこれを樂しむ」。これはどういう意味かと思ひまして、藤井實應猊下が当時増上寺にいらしたときに、たびたびお邪魔して御法語のご指導をいただいたのでございますが、これは難しいな、一言では言えないとおっしゃつて、私は私なりの考えを申し

上げて、しばらく教えていただいたわけです。「もし、浄土を願う人が病気になったならば早くお浄土へ行かれると思って病気を楽しくすると」が、そんな単純な法語なら伝承していくほどのことではないと思うんですよ。病気になったら早くお浄土へ行ける日が近づいてきたんだと、それで病気を楽しむ。病気になったら早くお浄土へ行けることができるんだ、ありがたいありがたいと思いなさいと、そういう意味なら代々伝わってないだろうと私は思うんです。

だから、私はこう考えているんです。恐らく聖岡上人もそういうお考えというか、座右の言葉として、病患を得てひとえにこれを楽しむということで大事に大事にあたためていらしたんだろうと思うのでございます。病気になって一番迷うことは、この病気は治るかな、大丈夫かしらということですね。また来月に落慶法要があるけど、それまでに病気が治るかどうかとかね。軽い病気は別ですけども、病気によりましては早く治る病気かどうかということを一歩悩むと思うんです。病気になったら、ちゃんと治療をしていけば治るか、だめか、どっちかですね。必ず治るんだという自信を持つ。そして、治ったならば、海外旅行もまた行くことができるのか、また好きなカツ丼も食べることができるのか、好きなお酒を飲むこともできる、そういうことを考えるだけでも楽しいですね。そう

というような考えが病気を楽しむということですね。治ったらこんな楽しいことができるという、そういうことを考えれば心が楽しくなるだろう、そういう楽しくなった心で治療に励みなさいというわけです。

でも、そう思っても薬やお医者がだめで命がだめになるかもしれない。だめになったならば、そのときはお浄土へ行くことができるんだ。だめになったらお浄土から仏さまが迎えてくださるんだ。そういう気持ちを抱いて治療に励みなさい。治ったときの喜びを思う、それから、だめになった場合には仏さまがちゃんとお浄土へ連れていってください。そういう二つの喜びを持って治療に励むことですね。だから、病患を得てひとえにこれを楽しむというのは、病気になったからこそ、その二つの喜びがあるんだと、私はそういうことを教えていただいているのではないだろうかと思うんです。だから、聖問上人が大事にあたためていらしたんだろうと思います。

次に「どのように生きるか」ということですが、これは皆さんご承知のとおり、毎日をどのように生きていくか。「現世を過ぐべきようは、念仏の申されん方によりてすぐべし。念仏の妨げになりぬべからん事をば、いと捨つべし」という御法語がございます

ね。つまり、お念仏を称えられるような生活をしましょう、ということではないでしょうか。コマは心棒があってクルクルッと回っているように、生活の中心がお念仏であり、お念仏を中心にして生活がぐるぐる回っているんだよということですね。そういう生き方を法然上人は教えてくださったろうと私は思います。

お念仏の功德ですが、法然上人も御法語に、仏さまが守ってくださいるから滅罪、それから、延年転寿とかいろいろ教えてくださっておりますが、「亡き人のために念仏を回向し候えば、阿弥陀ほとけ光を放ちて、地獄餓鬼畜生を照らし給い候えば、この三悪道に沈みて苦を受くる者その苦しみ休まりて、命終わりのち、解脱すべきにて候」亡き人のために念仏を称えると、こういう功德があるんだとおっしゃっているわけです。念仏を称える私たちにはどういう功德があるか。みんな功德があるのですけれども、先ほど申し上げましたように、お念仏を一所懸命称えれば罪がなくなるという功德もごさいます。

『浄土宗略抄』には「弥陀の本願を深く信じて、念仏して往生を願う人をば、弥陀仏より始め奉りて、十方の諸仏菩薩、観音勢至、無数の菩薩、この人を圍繞して、行住座臥、夜昼をも嫌わず、影のごとくに添いて、諸々の横悩をなす悪鬼悪神のたよりを払い除き給いて、現世にはよこさまなる煩いなく安穩にして……」、つまり、お念仏を称えていれば

安穩な日々を送ることができるといふことです。これは私が檀家によく言う言葉でございますが、お念仏をしていると仏さまがあなたの周りを守ってくれる。悪鬼悪神が来るという、これをみんなはね除けて、あなたを守ってください、祟りやなんかきてもはねのけてくださる、だから心豊かな幸せな毎日を送ることができると、法然上人は説いておられるのだから、これはお念仏の功德であると私はいつも言うんです。

増上寺におりますといろんな相談があります。例えば、あるお婆さんがあるお寺にお詣りに行き、そこで行者みたいな人と知りあい、その人から〇〇山と書いた袋に入ったお札をもらいました。実はこれは〇〇山でも何でもありません。〇〇山のお札のごとく騙しているわけです。その後、このお婆さんは病気が治ったのでありがたいことだと思っていたら、百万円出せと言われたというんです。百万なんてお金の持ち合わせがあるわけありませんね。すると五十万にまけるといつてきたということ。おばあさんが二万ぐらいなら持っていると言ったら、あとは月賦でよろしいと言ったそうです。それで二万円を払って、お札をもらってきたというんです。でも、ちょっとおかしいなと思ったんですね。

というのは、次の支払振込伝票がきまして、二万円を振り込んだんだそうです。でも

ちっとも体がよくならない。それで私のところへ来たわけですね。ときどき催促の電話がかかってくるようになった。これを納めないで電話がかかってきたらどうしよう、それが悪いと言うんです。そんなものは簡単なんですよ。何々心霊協会というんですが、そこから電話がかかってきたら、どうせお金の催促だろうから、南無阿弥陀仏と称えて電話を切ってしまうえば、絶対にかかってこないと言ったんです。本当に大丈夫ですか、というから、大丈夫だ、ここにちゃんと書いてある。悪鬼悪神を払い除いて守ってくださいるんだから、何も言うことはないですよと申しました。そしたら、電話がかかってきたそうです。そこで、おばあさんは言われたとおり南無阿弥陀仏と言ってガチャンと切ったら、二度とにかかってこないということでした。ですから、やっぱりお念仏の功德というのはすごいんです。これは余談でございませうけれどもね。

それから、若い人が創価学会に入っていたんです。うちの檀家ですよ。友達に勧められて創価学会に入ったんだそうです。創価学会というのは自分だけが入ってもだめなんですね。私が入ると、私の家内も子供も全部入れなきゃならない。その人はまだ若いから、下の子供はまだ二つなんです。それも入れなきゃならない。子供が三人いますから、そこで会員が五人ふえたことになるんですね。でも、二年ぐらいやっていて矛盾を感じてやめ

たいというんですね。そこで、やめるについては電話がかかってくる。押し掛けて来る。そういうときにどうすればよいのかと、いうので、お念仏を称えればよいと申しました。電話がかかってきて、宗教のお話だと言ったら南無阿弥陀仏と言って切りなさい。また、家に押し掛けてきて、宗教のお話だといったら、南無阿弥陀仏と称えなさい。そうしたら、彼は素直にやめてくれました。

これも余談ですけれども、脱会をするときには、創価学会のお寺に本尊さまを持って行って、脱会式をしなければだめなんですね。やめる儀式をしないとやめられないということなんです。そこでまた相談にきたんです。それで、よく考えてごらんなさい。結婚するときには結婚式をやるけれど、離婚するときに離婚式をやりますか。そんなことは常識でわかるでしょう。だから、はがきで脱会すると連絡すればよい。あとはお念仏をするんですよと教えまして、事なきを得たわけでございます。お念仏の功德というのはすごいなということでございます。

「何のために働くか」ということは、やす／＼と云えることではありませんが、なかなか大事なことでございますね。例えば、浜松町の駅で降りたらおまわりさんがいて、「あ

なとはどこからいらっしやいましたか」、「千住から来ました」、「どこへ行くんですか」、「増上寺に行きます」、「何しに行くんですか」、「大殿説教を聞きにまいりました」。こういうことはだれだって答えられますが、こと、人生のことになると、「あなたはどこからこの世の中にやってきて、どこへ行くんですか。この世の中に何しにきたんですか」と言われて、すらすら答えられる人はいないわけでございます。何のために働くんだということに関連して、そういうことを申し上げたわけでございます。

法然上人が二位の禅尼政子に与えられた御消息がございます。「同心に極楽を願ひ、念仏を申す人をば、卑賤の人なりとも、父母の慈悲に劣らずおぼしめし候べし。今生の財宝の乏しからんにも、力を加え給うべし。さりながらも、少しも念仏に心をかけ候わんをば、勧め給うべし。これ弥陀如来の、おんみやつかえと、おぼしめすべく候なり」。先ほど、お念仏を称えることが生活の中心であると申し上げましたが、お念仏を称えるということがとても大事なことです。同心にお念仏を勧めるといふことも、とても大事なことです。何でそんなことをするかというと、これは弥陀如来のおんみやつかえとおぼしめすべく候なりと。私たちは仏さまにお仕えをするんですね。だから、学校の先生、あるいは八百屋さんでも何でも仏にお仕えしているということになるんじゃないかと思うんですね。

恐らく法然上人のこの御法語にヒントを得たのではないかと思うんですけども、蓮如さまは、「商いするとも仏法の御用と心得べきと仰せられ候」とおっしゃっているんですね。親鸞さまかどなたかがおっしゃったのかどうかわかりませんが、そういうふうに言われました。日蓮さまは、「御宮仕えを法華経と思召せ」（四条金吾への返事）と言っているんです。恐らく蓮如さんも日蓮さんも、この法然上人の二位の禅尼にくださったお手紙、「これ弥陀如来の御宮仕えと思召しべく候なり」という言葉を知っていたかどうかわかりませんが、法然上人がしょっちゅう弟子に教えていらして、そういうことを伝え聞いてこういう言葉が出てきたのではないかと私は思うんです。余りにも似てますでしょう。特に日蓮さまは法然上人の『選択集』を徹底的に研究されて、教学的にもそっくりそのまま写しているということを、竹中信常先生が話しておられるのを聞いたことがあります。とにかく私たちが働いているのは弥陀如来の御宮仕えなんです。病院で病人を看護するのも、運転手が車を運転するのも、子供のお守りをするのも、その裏には仏さまがいるんです。どんな仕事をする人にも仏さまがいらして、その仏さまにお仕える仕事としてやらせていただいているということなんです。仏さまにお仕えしているわけですから、どうなったってあとは仏さまがやってくださるといことになるんだと思います。

それから、これも関連しておりますけれども、生きることの最終目的は何かというと、浄土に往生するということですね。若い人に話しても、おまえが生きている最終ゴールは極楽だと言っても、なかなかわかってもらえないんですね。そんな話は聞きたくないということです。私はよく言うのでありますけれども、去年とことしと比べて少し人格がよくなったかと聞くと、それは若いときとは違って年とともに少しずつ人格的にステップ・バイ・ステップで上がっていくと思いますと言うんです。では、十年先はどうか。十年もたてばもっともっと上がっていると思います。それでは、長生きするということは人間がだんだん向上していくことなのか、そうじゃないと困る。四十の人が五十になり、六十になつたら、年の功といってだんだん人格が上がっていかなければ困ります。それはわかるんですね。では、一番最後はどうなるかというところ、これを仏教では成仏というんだ、と私は言うんです。仏になるということですね。

仏にならなくても、あの人は仏さまみたいな人だと言われる人が世間にいるでしょう。そういう人になりたいということを目標に我々は生きて、毎日の生活の中で修行をしているはずだと思うんです。仏さまのような人ではなくて、仏さまになることが成仏なんで

す。だから、これが人生の目標なんだと。こんなことを話しますと少しはわかってもらえるんです。お念仏によって、人格の完成、その最も完成した姿というのが成仏、仏になるということでありますけれども、法然上人の教えは、凡夫はなかなかこの世の中においては成仏することは難しい、私もとてもできない。だけど、お念仏をする功德として仏さまがお浄土へ連れていってください、成仏は難しいけれども、お浄土へ行くことはやさしいと言っているんですね。

「成仏は難しいといえども 往生は得やすし」、あるいは、「往生浄土門というは、まづ浄土に生まれて かしこにて悟りをも開き、仏にもならんと思ふなり。これを易行道という」というんですね。「生死を離る道多し、いづれよりも入らせ給え」、どこから入ってもいいんだというわけです。浄土宗のお念仏というのは、成仏というのはとてもできないが極楽へ往生することはできる。極楽へ行ってから上善人と一緒に暮らすことができ、仏になることができます。私は、それがお念仏に生きる者の最終の目標であると思います。その過程における毎日の生活というものは、仏さまへの宮仕えであると、そんなことを考えているわけです。

またこの世の中には他人は一人もいない、お念仏を称える人はすべて自分の父母と思

今、何を語ろうとされているのか

い、父母の立場に立って手を合わせていきなさい。この世の中ではお念仏を称える人同志は他人じゃないんだよということをおっしゃっているんだと思います。

まとまりのないお話をさせていただきましたが、ちょうど時間になりましたので。私がふだん檀家に話しているような次元の話でございまして、ご住職方にお話をするほどのことでもありませんけれども、拝読しております御法語についての私の受け取りかたの一端をご披露申し上げたわけでございます。

学
問
と
修
業

大
橋
俊
雄

法然上人のお言葉の中には、私たちの生活の指針となるものが多く見受けられます。法然上人の書き残されたものは数多く、そのすべては『昭和法然上人全集』に収められておりますが、そうした中から、「学問と修行」について書かれたものの幾つかを、私自身の反省のつもりで述べさせていただきますと思います。

法然上人は、「われ聖教を見ざる日なし、木曾の冠者花洛に乱入のとき、ただ一日聖教を見ざりき」と述べております。自分は、常日頃、聖教を拝見している。しかし、ただ一度、木曾義仲が京都に乱入しました寿永二年（法然上人五十一歳）、そのとき一日だけは本を読まなかったといっています。そのくらいよく勉強なされております。

また、故郷をあとにし、比叡山に登った上人は、以来比叡山で勉強なされております。法然上人はそれを山修山学といって表現しておりますが、「山修山学の昔より五十年間諸宗の章疏を披閲し、叡岳になきところのもの、これを他門に尋ねて一見を遂ぐ」と申されているように、五十年間ご本を拝見しなかったことはなく、もしも自分の必要なもので比叡山にないものは、他のところまで出掛けていって本を見つけて参考にしたといっているくらい、よく勉強をなされていたわけで、常に精進・努力をなされておられたことを知ることができます。

その結果といたしまして、「(戒定慧)三学のほかに、我心に相應する法門ありや、私身に堪たる修行やあると、よろづの智者にもとめ、諸の学者にとふらひしに、をしふるに人もなく、しめす輩もなし。然間なげきなげき経藏にいり、かなしみかなしみ、聖教にむかひて、手自ひらき見」た結果、善導和尚の觀經の疏の、「一心專念弥陀名号」の文を発見なされたのでありますが、比叡山におられ、天台教学を学び、修行しておられた三十余年の間に、自分の身に思いをいたしながら、だれもが救われる道はないものかということを考えておられたのです。そして、多くの人たちに教えを問うたのです。南都に赴いたのも、宇治すなわち平等院の法藏に入ったのも、そのためだったのですが、万人の救われる道を教えて下さる人はなかったのです。その間の事情を「なげきなげき経藏に入り、かなしみかなしみ聖教にむかひて」と申されています。

法然上人のお考えの万人の救われる道というのははどういう教えかといいますと、造像・起塔をもし往生の条件としたならば、貧しく生活に困っている人は往生の望みを絶ってしまう。現実ではこの世の中には貧しい人たちが多くて、富栄えている人たちは少ないのです。また、知恵の優れているということを往生の条件とするならば、愚かな知恵の低い者たちは往生の望みを絶たれてしまう。世の中には愚かな知恵の少ない人たちが多く

て、知恵ある人は少ない。

あるいはまた、見聞が広い人でなければ往生できないということを経験したならば、この世の中には見聞の狭い人たちは往生を遂げることはできない。この世の中には見聞の狭い人たちが多くて、見聞の広い人たちは少ない。

もし、厳しい戒律を持たなければ往生できないということが条件であるとするならば、戒律を破ったり、戒律を持っていない人たちは往生の望みを絶たれてしまう。この世の中には破戒の者が多くて、厳しく戒律を持っている人は少ない。法然上人は本願ということばを用いていますが、本願は立場をかえていえば条件ということです。すべての人が往生できる条件、貧しい人でも、愚かな知恵の低い人でも、見聞が狭くても、戒律を持っていない人でも、往生できることを前提に見出したのが、『観経の疏』にある、「一心に専ら阿彌陀仏の名号を唱え、行住坐臥、時節の久近を問わずに名号唱えた者が往生できる。」という文であり、ひたすら名号を称えること、専修念仏だったのです。

この文は宇治の法蔵から発見された善導大師の『観経の疏』によって知ることができたわけですが、果たしてこれですべての人が本當に救われるのか……。この疑問の中で法然上人の心をとめた人が遊蓮房であったのです。

遊蓮房との出会いについて、上人は「浄土の法門と、遊蓮房とにあへるこそ、人界の生をうけたる思出にては侍れとぞ」と、浄土の法門と遊蓮房にお会いできたことは、人間として生まれてきたよい思い出になった、と仰せられております。この遊蓮房という方はどういう方かといいますと、藤原通憲（信西入道）の十一番めの子供として生まれた是憲という方で、法然上人の門に入って遊蓮房円照と名乗ったというところでございます。『明義進行集』という本がありますけれども、それによりますと、言葉数も少なくとももの静かな性格で、やせ型のどことなくひ弱な人であったということでもあります。

京都の西山に粟生の光明寺という浄土宗の西山派に属しているお寺さんがありますが、その粟生の光明寺の裏山に広谷というところがありまして、そこに、この遊蓮房が住んでいたのです。

遊蓮房という方は、『往生要集』的な観想念仏を行っていると同時に——浄土教の中には比叡山系の浄土教と、南都の方に伝わりました南都浄土教がありますが、南都浄土教では、善導大師の『観経の疏』を基にいたしました浄土教が行われていたのです。——南都系の浄土教が強調した善導大師の教えに立脚した高声念仏の実践者で、現身に靈証を得たのが遊蓮房だったのです。遊蓮房が身をもって唱えた念仏は高声の口称念仏だったので

けれども、口称念仏を一生懸命唱えていて、いわゆる靈証を得たわけです。靈証を得るということは、自ら極楽浄土のあり様を拝み、そして阿弥陀仏の姿を見奉るということで、遊蓮房はそのような靈証を得た人であったのです。

この遊蓮房という方に、法然上人は比叡山の黒谷を出られました四十三歳のときに会いました。遊蓮房に会って、お念仏を唱えることによって必ず救われるということを知ったのです。法然上人は、このお念仏によって私は救われるのだ、私ばかりではなしに多くの人たちが救われるのだ、という確信を得たわけです。浄土の法門と遊蓮房に会えたことは上人が人間として生まれてきた良い思い出になったといっています。法然上人は、浄土の法門と遊蓮房に会えたということが、人間と生まれてきて良かったという思い出になっているわけですが、このようなことは、それぞれのお方にもあろうかと思いますが、それについて、ほとんど同じような文章があります。

明治の時代に増上寺のご法主におなりになり、さらに知恩院にも出られた方で、福田行誠上人という方がおりますが、この福田行誠上人は、「予行誠は幸に仏法に逢へる中、特に慧澄和上に逢ひ奉りしを以て、人界に生まれ出たる思ひ出と思ひ侍るになんなりけると申されています。

この慧澄和上という方は、比叡山におられた徳者だったのです。行誠上人は十九歳のときに、比叡山の麓にありました世尊寺というところへまいりまして、『天台四教義集註』をきいております。今の比叡山と違ひまして、明治の頃の比叡山には、山中の各地から多くの修行僧が知名な学僧のもとに出掛けて法を聞きに来ております。朝早くから草履がけで集まって来たようです。ここに集まった人たちは七、八十人もいたろうかと言っておりますが、集まって来た人は真劍そのものでした。行誠上人は、慧澄和上に会ったことが、仏法にあい、そしてこれから先の指針を得るうえに大きな励みになったといっております。

私自身についていえば、法然上人のことを調べてみようと思いましたが二十代前半の頃でございました。そのころ法然上人の研究、特に『選択集』の研究を精力的におしすすめておられた石井教道先生にお会いしたわけです。昭和二十六、七年の頃、先生は『選択集の研究』の大綱編を書かれました。その中で、法然上人という方は、一気に選択本願の念仏、専修念仏に達したわけではなく、やはり人間ですから、何回か思想的な遍歴というのがあるのではないだろうか、というようなことを書いておられたわけです。四十三歳までの法然上人と、四十三歳で回心したときの法然上人と、そこで止まっているわけ

ではなしに、さらにその後も思想に遍歴があるのではないか……。それを調べるには、どうしても法然上人のお書きになったものを、書誌学的に整理してみなければならぬ。望月信亨先生がお書きになった『法然上人全集』がありますが、もう一度思想的な遍歴、変遷、発展、そのようなことを踏まえた上で、異本がある場合は厳密な校合をしてつくってみようではないかということで、石井先生は『法然上人全集』をつくられたわけです。私はそのときに先生のお手伝いをさせていただいたのです。それが縁で、法然上人の研究活動に入ったのです。このような人とのあいには皆さんにもあろうかと思えます。法然上人は、遊蓮房に会ったということ、浄土の法門に会ったということが、人間として生まれ出た大きな思い出になり、浄土宗の開宗ともなったのです。

次に、法然上人は、念仏と、終生捨て去ることがなかったという学問との関係についてどのように考えておられたかと申しますと、沙弥道遍は「故上人おほせられてはく」として、道遍の伝え聞いたことばとして「往生のためには念仏第一なり。学問すべからず。ただし、念仏往生を信ぜん程はこれを学すべし」と述べています。

法然上人の生涯を書かれましたものに四十八卷のお伝記がございますが、それを『四十八卷伝』、あるいは『勅修御伝』と呼んでおります。道遍という方は、その中に、石川禅

門という名前で出ております。あるいは、渋谷七郎入道道遍という名前で記されておりますが、道遍は相模国石川、現在でいいますと藤沢市の石川というところに住んでおられたので石川禅門とも呼ばれています。

「往生のためには念仏第一なり。学問すべからず。ただし念仏往生を信ぜん程はこれを学すべし」。往生のために必要なのは念仏である。念仏以外の他のすべての行は何ら必要とはしない。名聞利養をはかるために学問をしてはならない。

しかし、学問的な裏付けがなければ念仏をとなえ往生できないというならば、学問するのもよいだろうといっているのです。いわゆる念仏と学問とを比べまして、どちらの方だ大事かといえば、念仏が第一である。しかし、念仏往生を了解するための手段としては、やはり学問も大事であると、そのように理解できるおことばです。

この学問についての考え方も、法然上人は終生同じではないのです。「往生の正業は、これ念仏と云ふこと、釈文に分明なり」。往生の正業として念仏が重要であるということにははっきりしている。「有智無智を簡ばすと云ふこと、又顯然なり」。念仏が、有智の者無智の者を問わず、だれもが必要だということは、これもはっきりしている。このようにして、「往生のためには、称名をもて足れりとなす」というのです。ところが、「もし学

問を好まんと欲はんよりは、学問と念仏とを比べてどちらかというならば、「一向に念仏して往生を遂ぐ」べきである、ひたすら念仏して往生するにこしたことはない、と申されています。ここでは比較級という形で、どちらかといえば学問よりも念仏なんだと、そのように申されております。

ところが、晩年の『一枚起請文』になりますと、これはもう皆さんがご存じのように、「もろもろの智者達のさたし申さるる、観念の念にもあらず」。中国や日本でいろいろな知恵ある学僧たちの述べておられるような観想的な念仏でもない。「又学問をして念の心をさとりて申す念仏にもあらず」。また、学問をすることによって、お念仏の意味を理解して申す念仏でもないのだ。ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申しせば疑いなく、まがうかたなく往生できると信じて、念仏申すことであり、別に難しいことではないという、お念仏を申すことをお勧めしているのです。言い換えますと、念仏するには学問は要らないということです。

そのようなことで、法然上人としましては、いわゆる学問と修行ということにつきましても、学問は要らないのだ、修行一途に進んでいけ、というのが法然上人の最後にたどりついたお考えだったのです。

それならば、私たちの修行、日常の生活の中で、念仏はどのくらい申さなければならぬのかということになりますが、それについて法然上人は、「故上人の仰せられ候しは、在家のいとまなからむひとは一万二万などをも申べし」と申されております。

即ち、在家で家業に忙しい人は、一万二万でもよいから申しなさいということです。いとまなからん人が一万二万なのです。それなれば、出家した人はどうかといえますと、「僧尼などとて、さまをかへたらんしには、三万六万などを申すべし」「さまをかへたらん」といいますのは、剃髪して様子を变えた人、袈裟・衣を着ている人ならば、これはどうしても三万遍、六万遍のお念仏を唱えなければならぬと申されております。「いかにもおほく申にすぎたる法門はあるべからず」。本当に多く申して多過ぎるということはない。念仏は、より多く申すことによって心が浄化されるということです。「百四十五カ条問答」では「念仏のかずは一万遍をはじめにて、二万三万五万六万、乃至十万まで申候也。このなかに御心にまかせておぼしめし候はん程を、申させおはしますべし」と申され、晩年になりますと、「源空は、大唐の善導和尚のをしへにしたがひ、本朝の恵心の先徳のすすめにまかせて、称名念仏のつとめ長日六万遍なり。死後やうやく近づくによりて、又一万遍を加へて長日七万遍の行なり」というように、七万遍の念仏を申しておられ

ます。

関通上人という方がおられました。関通上人は、江戸時代に出られました念仏者です。この関通上人は、お念仏について、まず、出家者であると自分が認めている良い出家者であるからには、念仏を三万遍以上申さなければ坊さんとはいえないと申し、関通自身も「今よりのち畢命を期として、日々三万称以上を課し、一声の称仏も余報のためにせず、皆悉く極楽に回向せん」と発願しています。そして法然上人は「生らば念仏の功つもあり、死なば浄土へまいりなん」と、一つ一つの念仏といえますものを、すべて極楽浄土に生まれるためにふり向けよう、回向しようと、努めるべきであるといっているのです。しかし、私たちの生活を見ますと、そのように多くのお念仏を唱えるということは、なかなか難しいのです。

私自身は、毎朝およそ一時間ほど念仏を唱えています。父は二時間ほど唱えています。大薫香一本は風のあるなしや、天気の場合で多少の違いはあっても、大体二時間くらいたちますと消えます。父はお線香が消えるまで唱えつづけていたのですが、私は勤めがありますから二時間もつとめられませんので、お線香を半分折ってやりますと、ちょうど一時間です。そのようなことで、私は一時間の念仏は唱えております。

一時間の念仏を唱えたところが、数からしますとそれほど多くはないと思います。法然上人、あるいは閑通上人は、やはり出家者であるならば、三万遍くらいの念仏は少なくとも唱えるべきであると、言っておられるのですから。そうしますと、私たちとしては、なんと恥ずかしいことだなと思います。念仏を唱えるのに多く申すにこしたことはありませんが、浄土宗では尋常念仏を正義としておりますので、少なくともよいから日々怠りなく念仏申すことが大切なのです。日課念仏を重んじていることは、伝法の会座で日課念仏を誓約していることによっても明らかです。浄土宗の生命は日課念仏を厳守することです。もし、日課念仏を怠たり、その誓約がただ伝法の会座における一つの形式としておこなわれているということでありますと、宗門の真生命は失われてしまうことになります。定められた日課を怠りなく唱えることによって、決定往生の信仰も確立し、安心立命の境地にも達し、三垢消滅、身意柔軟の心身の改造も得られて、まことに生き甲斐のある法悦の生活をおくることができるのです。

念仏を唱えることによって、「此念仏は決定往生の行なりと信をとりぬれば、自然に三心は具足して、往生するぞと、やすやすと仰せられ侍しなり」。

この念仏は、きっぱりと往生が決まるための実践行であると信ずるならば、自然に三心

即ち至誠心、深心、回向発願心が具足してくるといふのです。至誠心といふのはまことの心、深心といふのは、深く阿弥陀仏を信ずる心、回向発願心といふのは、必ず往生できる心に誓うことです。この三心をもって深く阿弥陀仏を信ずれば、必ず往生できるのだという信念を持って念仏せよ、と法然上人は、すらすらと淀みなく仰せられたということです。

ではどうしたならばお念仏を長い時間唱えることができるかといふと、私たちは何らかの機会を与えていただかなければ、やはりお念仏を唱えることはできないのです。

法然上人は、毎年、元日から始まりまして五十日とか、百日間をかぎって別時念仏会を修しております。百日といふと、三か月のお念仏になりますけれども、その間、終始念仏を唱えているわけです。そのような一つの機会を与えて下さることによって、私たちはお念仏を唱えることができるのではなからうかと思ひます。

別時念仏につきまして法然上人は、「ときどき別時の念仏を修して心をも身をもはげまし、ととのへすすむべきなり。日々に六万遍七万遍を唱へば、さても足りぬべき事にあれども、人の心さまは、いたく目なれ耳なれぬれば、いらいらとすすむ心すくなく、あけくれば忽々として心閑ならぬ様にてのみ、疎略になりゆくなり。その心をすすめんために

は、時々別時の念仏を修すべきなり」。

三日とか一週間とか十日とかというふうには日時を定めて念仏し、心も身をも励まして、信仰が深まるようにしなければならぬ。浄土宗では、一般的にもそうなのですけれども、一掃除二動行三学問といっておりますが、やはりお念仏を唱えるということ、修行をするということが必要だと思っております。そのような修行をすることによって、信仰を深める努力をしなければならぬと思います。日々に六万遍七万遍を唱えれば、それで十分のように思うけれども、人の心さま（気性）というのは、ひどく目慣れ耳慣れたりするので、じりじりと前に進むとすると心が少なくなる。慣れてしまうから、少なくなる。惰性におちいってしまうのです。

「あけくれば忽々として心閑ならぬ様に」というのは、朝晩は何となく、あわただしく心が落ち着かない。ですから、ぞんざいになってしまう。ただ、唱えさえすればよいということになってしまう、それではいけないのだということです。やはり、常に新しい気持ちを持ってお念仏するようにしなければいけない。これはお念仏ばかりではなしにすべてのもの、学問でもそうなのですが、もう慣れてしまえばそれで惰性になってしまう。惰性ということは排除しなければいけない。ここではお念仏について言っているわけですが、そ

のお念仏ばかりではなしに、すべて惰性に陥るといえることがあってはいけません。惰性に陥ることのないようにするには、ある一定期間を定めることが必要なのだということです。そのような「疎略になりゆく」心を励ますためにも、ときどき別時の念仏を修すべきであると、言っています。

一つの道場に入れば他の人はどうであろうと、それに打ち向かっていくほかにはないのです。私も、ものを書いたりすることがありますが、そのようなときに、出版社からは、何月何日までに書き上げてほしいといわれるわけです。人間のもつ惰性といたしまして、期限が定められていてもなかなかできないのが常です。ところが出版社としては、ぎりぎりの日までは待ってくれますが、営利を目的としていますので、大幅に日がずれてしまいますと、困ってしまいます。そのようなとき、いわゆる缶詰にされまして、監視されながら書くはめになります。そのようなことをして、『アジア仏教史』を書いた覚えがあります。そのようなこともありましたけれども、缶詰にされて初めて約束を果たすことができましたわけです。

あるいは、お念仏についてもそのようなことがいえません。若い頃、念仏を唱えようと、信州の唐沢に登りまして阿弥陀寺で、真生会という念仏のついでで、土屋観道上人や中野

善英上人という方について一緒に、一週間ほどお念仏を申したこともありましたが。一味会の中野上人には、東京や鎌倉で、数年間一緒にさせていただきました。念仏の芽を育てていただきました。この間、十五日にも真生会の別時会がありました。しばらくぶりでお念仏を心ゆくまで同行の皆さんと唱えさせていただきましたが、やはり日時が決められていなければなかなか申すことができない。そのようなことを思いますと、やはり別時の機会を与えて下さるということは、ありがたいことだと思っております。

次に、説法について申しあげたいと思います。学問や念仏が自行ならば、説法は化他です。法然上人は「浄土宗の学者は、まずこの旨を知るべし」。浄土宗の教えを学んでいる者はこの旨を知ってほしい。「この旨」というのは、これから後に述べるところのことでありますが、その一つは、「有縁の人のために身命財を捨てても、ひとえに浄土の法を説くべし」ということです。ご縁がある人のためには、この身も心も財産も捨てて、ひたすら浄土の法を説かなければいけないということです。

二つ目は、「自らの往生のためには、もろもろの囂塵ごうじんを離れてもっぱら念仏の行を修すべし」ともうされております。「囂塵」といいますのは、いろいろな世俗のうるささ、都会の雑踏というようなもので、これを離れて、もっぱら念仏の行を修すべきである。私た

ちとはかく、お念仏を唱えるということについても、何をするにしても、自分の体のことを先ず第一に考ます。命を考えます。それが凡夫です。致し方ないことです。私たちは身命財のための法務をおこない、法を説いてまいります、法を説くには身命財をかえりみず、その全てを捨ててもやるべきだということです。なかなか修行することはできませんけれども、そのようなことができる雰囲気をつくるのが大切です。先ほども申しましたように、都会の雑踏を離れて、家族とも離れて、そして一人で——法然上人は「一所にて申されずば、修行して申すべし。修行して申されずば、一所に住して申すべし。ひじり申されずば、在家になりて申すべし。在家にて申されずば、遁世して申すべし。ひとりこもり居りて申されずば、同行と共行して申すべし。共行して申されずば、一人こもり居りて申すべし」。一人で申すことができれば多くの人たちと一緒に申しなさい、と申しておりますけれども、やはり一人になりますと、とかくああしたいこうしたいと考えることもあります。あるいはまた、その途中で出掛けていかなければならないということもあるわけです。しかし、皆さんと一緒にならば、負けてはいられないのだ、抜けることはできないのだと、そのようなことで一緒にやるわけです。そういうようなことも必要だということなのです。それが「囂塵を離れて、もっぱら念仏の行を修すべし」の意味だと思いま

す。このように、教を説くことと、念仏を申すことの、二つのこと以外になすべきことはないのだと言っております。

法然上人という方は、いかにすれば多くの人たちが救われるか、ということを書き考えておられました。法然上人の出られた平安時代の末から鎌倉時代の初めにかけての時代を考えますと、だれもが仏教というもの、仏の教えに遇うことができなかった。当時の人たちにとって、仏の教えは、高嶺の花であったわけです。一般の人たちは仏に接し僧たちから教えを聞くことができない。多くの人たちは、身を粉にして生活し、生きるのに精一杯であったのです。そのようなときに、法然上人がおでになられて、ただひたすら、お念仏を唱えることによって救われることができるという説かれたことは、その当時の人たちにとっては全くの喜びであったと思うのです。時代が現在と違いますから。現在、別時の念仏をときどき修して修行せよといったところが、なかなかできないと思うのです。そうした点から考えますと、法然上人の時代の人たちは、お念仏を唱えることによってありがたい仏の教えに遇うことができる、浄土に往生できるのだという望みを持っていたと思います。このことは法然上人ばかりではなしに、親鸞聖人にしても一遍聖人にしても、すべての宗祖と仰がれる人たちがそれぞれどうしたならば多くの人たちを救うことができるのかとい

うことを念頭に置いて修行をなされ、多くの人たちを教化なされたと思うのです。

私たちは法然上人のお言葉によっていろいろ知ることができ、法然上人のお言葉を通じて在家の人たちに教えを説いているわけです。法然上人のお書きになったものは『法然上人全集』の中にたくさん収められておりますが、私たちはそれを媒介として修行し、多くの人たちに教えを説いています。

法然上人、親鸞聖人、あるいは一遍聖といえば宗祖ですから、聞かれればそれに対して自分自身が答えていくことができます。法然上人と上人のお弟子さんと、信者の方との問答のやりとりをお書きとめられたものに、『百四十五か条問答』というのがあります。この『百四十五か条問答』を見ますと、法然上人に、「私はこういうことをしておりますけれども、どのようにしたらよろしゅうございますか」とお問いになりますと、法然上人はそれに対して適切にお答えになっておられます。

私たちは、宗祖がこうおっしゃったからと、法然上人のおことばを媒介として答えます。しかし、時代は進歩して、既に変化しているわけです。そのようなことを考えますと、私たちは現在のこの世の中に相応する教えといえますものを説かなければなりません。私たちが宗祖であるという一つの信念、私は法然上人である。もしも法然上人である

ならば、このように説くであろうということで、いわゆる極楽浄土ということ、あるいはお念仏ということ、すべてに適切な答えをしていくべき使命があると思います。適切な答えをしていくためには、法然上人の御法語を熟読含味しながら、法然上人を媒介としてお答えしていくべきである、あるいは説教していくべきであると思うのです。

はなはだまとまりのないことを申しましたけれども、法然上人の「学問と修行」を、一つのテーマといたしまして申し上げたわけです。まだまだ申し上げなければならないことがあるかと思いますが、これで私の務めを塞がせていただきたいと思えます。

『徒然草』と法然上人

寺内大吉

難しい話はするつもりはございません。中世の書物で『徒然草』というものがあります。兼行法師、われわれは中学校や何かの副読本で習ったもので兼行法師が書いた『徒然草』という随筆集がございます。なかなかの名文であって有識故実のこととか、断片的であるが平安朝の宮廷のこととか、諸行事のことが書かれています。このなかに法然上人に関する記述がございます。短いものなので、そのまま紹介させてもらいます。

ある人が、法然上人に問いかけます。「念仏のとき、眠りにおかされて（眠くなって）行を怠りはべることいかにして、このサワリをやめはべらんと申しければ、『目のさめたるほど念仏したまえ』と答えられたりける。いと尊かりけり」。

こういう答えをした。要するに、「お念仏の行を重ねておる。ところが眠くなってしようがありません。こういうときは、本当に駄目なんでしょうか」ということを問いかけたところが、法然上人は、「いや、眠くなったら寝なさいよ。目がさめたらまたお念仏をしなさい」とお答えになった。大変、これは尊いところである。兼行法師は言っているのです。

法然伝をみると、このある人というのは誰か。佐々木四郎高綱と書いてある。佐々木四郎高綱というのは木曾義仲が京都を占領していたときに、源頼朝の軍勢が京都へ攻め込ん

だ。弟の義経と範頼の軍が二手に分かれて京都へ攻め込むんですが、宇治川という川を渡った。このとき一番乗りを争った一人が佐々木四郎高綱、もう一人は梶原源太景季という。生月と磨墨という名馬に乗ってあの宇治川を渡ったんですが、このとき、梶原源太景季よりも先に佐々木四郎高綱が対岸に乗り上げた。いわゆる宇治川の一番乗りをやった人なんです。非常に当時としては有名なでございます。この人がそのあと侍をやめて念仏者になりました、そして法然上人のお弟子になったわけでございます。

ところが、侍上がりで非常に無骨な人ですから、法然上人から、「お念仏を唱えろ、唱えろ」と言われても、一生懸命唱えているんだけどもすぐ居眠りがコックリコックリ出てしまう。「これはあかん。こんなことをしてはあかん、あかん」と自分を戒める。でも、とうとう堪らなくなつて法然上人に、「お念仏もありがたいけれども、どうも眠たくて、眠たくてしょうがないんですが、これは悪いことでしょうか」と言ったときに、法然上人は、「いやいや、眠くなつたらゆっくりお休みなさい。そして、目がさめたらお念仏を唱えなさい。けっして、お念仏というものは難行、苦行ではない。むしろ法爾自然、自然のなかでこれを称えてみなさい」ということをおさとされた。兼行法師は、大変これはありがたいお教えである。こういうことを言い切れる人はそんなにいるもんじゃない、

ということを言外に匂わせたお言葉でございます。

続いてこの文章は、「また往生は一定と思えば一定、不定と思えば不定なり」と。一定というのとは一つの定めであります。「一定と思えば一定、不定と思えば不定だ」と。これも非常に難しい言葉でありまして、兼行法師はこれも尊し……、としてございます。また、続いて「疑いながら念仏すれば往生すとも言われけり」。また「これもまた尊し」。非常にこれは逆説的な言葉でございます。法然上人というお方は、念仏というものは間違いなく往生できると思えば往生できる。

だが、自分でそう間違いなく往生できると決め込んでいても、そのつもりであってももっと深く反省してみると、やっぱり違うんじゃないかなるかというふうに反省することがある。いま最初に言った「間違いなく往生できるぞ」と信じこんだ、これが一定なんです。ところがこのあとまた迷いが出てきて、「これだけではひとつしたら往生できないんじゃないか」と。これは不定なんです。そういう二つの面をまた、二つの面というよりも自分の環境とかそのときの状況に依じて、人間というものはいろんな考えになる。これは一定と思えば一定だという。不定だと思えば不定だ。要は念仏をなさいということと言っているわけなのでございまして、これまた大変尊い言葉です。ただ、疑いながら念仏

して、やっぱり往生する。これも疑いながらも念仏すれば往生できる。

法然上人の場合は、「一文不知の愚鈍に」あるいは「十悪五悪の身であっても往生できますよ」とおっしゃっている言葉の裏付けなんでありまして、だから一枚起請文にもあるように「ただし、三心四修と申すことの候は、みな決定して南無阿彌陀仏のなかに籠もり候なり」と。三心四修すというのは、大変高い理詰めには修法することなんです、しかし、それでさえも南無阿彌陀仏の六字のなかに全部吸収されているんだよ。そこで阿波介という陰陽師を引合いに出します。この男は粗忽であり、嘘はつき放題だ。しかも女を困ったりしていたとんでもない男。それが悔い改めてお弟子さんになった。その阿波介が称える念仏とわたしの念仏とどっちが尊いと思うかと問いかけた。お弟子さんは、「それはお上人様のおっしゃる念仏のほうが尊い」と言ったときに、法然上人は、「いやいや、そんなことはない。全く同じだ」。なぜかという、称えている自分が尊いんじゃない、称えられている「南無阿彌陀仏」が尊いんだということを主張なさっているわけでございます。

この兼行法師の、『徒然草』。この法然上人の境地がまことによくわかる。「尊い」「尊い」と言うことも大変勇気のいることでございます。『徒然草』というは、わ

れわれは何か世捨人が呑気に書いたものかと思っておりましたら、そんな書物じゃなかったんです。兼行法師の生きた時代というはきびしい戦乱の明け暮れでした。

後醍醐天皇が鎌倉幕府に反乱をおこし、これを打倒。建武の中興という天皇親政を取り戻した動乱の時代です。いったんは天皇親政の政治が確立したが、わずか四年で足利尊氏の裏切りで、結局、建武の中興はつぶれていく。そういう形で政権が転々とすると、民衆は大変な苦しみに陥っているはずでございます。この動乱の真っ直中に生きたのが兼行法師で、『徒然草』が書かかれています。

動乱のさなかによくもあんな呑気な文章が書けたなと思うんですが、いまの法然上人のお言葉に対する受け止め方、感じ方、これを噛みしめていくと、なるほどそういうときにいたからこそ、そういう時代に生きた兼行法師だからこそ、ああいうことが言えたんだなあと納得される。もっとかたい表現を使いますれば、価値観が安定していない。きょうの高い徳は明日は不道徳に変わる。幕府だ、いや天皇親政だ、常に社会モラルがひっくり変わるという。どんな時代が来ても不変で変わらず、貫いていくもの、これは法然上人のお言葉だ。「一定と思えば一定。不定と思えば不定なり」。どちらも真理であるということ。政治にも左右されない。

世情にも動かされない。こういうものなんだということが、われわれは改めて感得できるわけであります。

兼行法師という人は面白い人で、例えば、ある公卿が逮捕されて引かれて行きます。あの姿はまことに凛々しかったと書いております。兼好は大変な皇室主義者かと思えばそうでもない。足利尊氏が政権をとると、足利尊氏の家来で、なかなかの権力者で塩谷判官という人がいます。これは『仮名手本忠臣蔵』というのがございまして、吉良義央に似せられた男です。『仮名手本忠臣蔵』は、江戸時代に忠臣蔵が起こった直後にできた歌舞伎芝居だから、そのものの名前は出せない。足利尊氏、高師直なんていう名前を出した、いわゆる時代を足利時代に置き換えて芝居にしたものであります。この塩谷判官というのはそれほど権力のある人ではありません。しかし吉良義央のモデルとなった、高師直は足利四天王の一人ですから大変な権力者。塩谷判官は何の力もないが彼のお内儀さんが非常な美人だった。それに高師直が横恋慕——岡惚れをしたのです。高師直は文章も下手くそだし、書道も駄目だ。何とかして彼女の心をとらえようと思ってラブレターを送ろうと思うわけであります。ところが、自分は文章が下手だから、家来に、「いまの時代で文章で一番うまいのは誰か」「それは『徒然草』を書いた兼行法師です」と。確かに『徒然草』を

書いた兼行法師、文章は抜群だ。それじゃと、そいつにラブレターを頼んだ。また、この兼行法師は簡単に引き受けて、さらさらと立派なラブレターを書いて塩谷判官のお内儀さんの心をとろかしたという伝説まで伝わっているくらい、大変天衣無縫な人なんです。他人の女房に横恋慕する奴のラブレターまで書いた人が、『徒然草』の作者でもあったわけでございます。

そういうような天衣無縫、何事もとらわれない人が法然上人の言葉に「いと尊し」と。それも繰り返し繰り返し「いと尊し」と。これは、やはり法然さんの教え、思想というものがどの時代にも極めて重要な、しかも真理をうがっている事実を立証すると、私は信じているのでございます。

話はガラッと変わるんですが、先だって、ある席で武田鉄矢という若い人と一緒になりました。これが何者であるか私はわからないで、たぶん「赤いきつね」とか何とかコマーシャルによく出てまいりますから、たぶんこれは漫画家であろうと思った。「今度は何をかかんですか」と言うと、彼は「坂本竜馬をもう一遍やります」「坂本竜馬をまたかかんですか」「いや、坂本竜馬をまたやります」と。家へ帰って聞いたら、あれは俳優だって言うんですね。これには驚きました。あんな顔が長くて足が短くて（笑）、よくもあれで

俳優がつとまるなあとかきれたんでございます。

まあ、隣席で話を聞いているうちに、一つ非常にいい話をした。僕は「ははん」と感心してうなずいた。あの人のお父さんというのは、五十そこそこで死んだそうであります。それも肺ガンで死んだ。大変なヘビースモーカーでタバコが好きで、どうもそれが原因で肺ガンになったようだ。おふくろはまったく泣かなかった。ところが、いよいよ葬式がすんで出棺というときに、棺桶の蓋をかけようとすると、「ちょっと待って」とおふくろが飛んできた。胸にいっぱい抱えてきた。何を抱えてきたか。あの人の家はタバコ屋さんだそうですが、シヨートホープを四十九個抱えてきたそうです。そして、このシヨートホープを一箱ずつ父ちゃんの顔の両脇に詰めていった。「父ちゃん、四十九日まではこれを一箱ずつしておきなよ」と。つまり、タバコを一日十本以内にコントロールしなさいよ。節煙しなさいよ。こう言って父ちゃんの顔の上にハラハラと涙をこぼした。だから、シヨートホープ四十九個。

「死んで節煙するというのはどういことですかね」こういうことを私に聞くわけだ。

「うん、そりゃ君のお母さんは偉いことを知っているよ。あなたも念仏のことを教わっただろう」「うちは浄土真宗です」とは言っておりました。やはり、お念仏というのはお浄

土へ行きつきりじゃ駄目だよ。向こうへ行くことによって、旅の道々で修行するんだよ。七日、七日というのは修行するんだよ。だから、生前できなかった節煙を死んだ後、いままでは三十本、五十本吸っていたタバコを十本以内にしなさいよ。生前できなかった節煙を死んだあとやりなさいと、お母さんは言っていた。これは、自分自身も亭主の好きな赤烏帽子で、何度か節煙の勧めをしようと思ったんだが、どうしてもできない。父ちゃんがあんな好きなタバコを、しかもうちはタバコ屋だからふんだんにタバコはあるわけだ。店に飾ってあるタバコをヒョイと持ってきてプカプカ吸われる。自分のところが間接的には損をするんだけれども、お金が出ていかないからどうしたって見過ごしちゃう。まあ、もうかりもしないし、しかも体を壊すと言いたいところをつい見過ごしちゃった。自分も悪かったけれども、この世でできなかったことを死んだあと七日、七日の供養のなかで一緒にやろうよ、こういう偉いことを、お前さんところのお母さんは知っているんだ、と申しました。だからこそ、四十九日まで、残ったお母さんたちが供養するんじゃない。極楽浄土へ向かって旅立って行く仏様のための供養を死んだ父ちゃんもやる。これが本当の他力本願念仏の真意ではないか。いわゆる三心のなかに廻向発願心という言葉がごいます。つまり、死んでもなおかつ、仏のとなるための供養だ。そして法然上人のお言葉にもござ

います、正如房に与えるご消息、お手紙というもののなかに、死ぬ日は違っても蓮の葉の上に一緒に乗って教化、つまり残った念仏の教化と一緒にやりましょうという言葉が、あの正如房へのお手紙のなかにございます。

結局、お念仏というものはそういうもんじゃないかということ、しみじみ教えられたんでございます。私自身もついこの間、あるうちのお通夜に行きました。その息子さんが三十一歳で一週間病んだだけでポックリ死んでしまった。そして、まだ二十代の若い未亡人が残っている。これどう慰めるのか。お通夜のお経が終わったあと、あの武田鉄矢君の話をしました。「お宅の旦那さん、修行が足りなかった。そのままあの世に行くことになった。あなた、ここで一生懸命お念仏を唱えなさい。この人を仏にしなさいかん。この人もきっと目覚めて、気づいて、あなたと一緒にやるよ」と。一緒にいたそのご両親おじいちゃん、おばあちゃん、「私たちもやります。みんなで唱えれば、きっとそのなかにこの子の声が混じっているでしょうね」と。いや、このまたおじいちゃん、おばあちゃん、えらいことを言いやがったなと思っただけでございます。

また最近、私も感動したのは、これまたあるお通夜で、これは八十六になるおばあちゃんが亡くなった。お通夜の説教で、このおばあちゃんはきっと素晴らしい往生を遂げたに

違いないと、私は申し上げた。なぜかと言えば、いまから十五年前、私のうちで本堂を改築するとき檀家の皆様にご寄付をお願いした。このおばあちゃんにも、「十万円お願いしますよ」と言ったら、「いや、うちは亭主が死んだばかりでとてもそんなお金は出せない」「しかしおばあちゃん、これは一年でそっくり出せとは言っていないよ。三年間かかる。三年間で積んでくれないか。三年間で十万円ということは、毎月三千円ずつ」と。そうしたらおばあちゃんは、「毎月三千円ね。ようがす、やりましょう。ただし、それは十日、亭主の命日に持ってまいります。お墓参りを兼ねて」。そしてこのおばあちゃんはせつせと毎月十一日に三千円ずつを寺に運んでくれたんでございます。私が、「このおばあちゃんは素晴らしい往生を遂げたに違いない」とお通夜の席で断言できた理由は、その三千円の中身なんです。毎月十一日に三千円を寺へ運んでくださるんですが、かつて一度も千円札というものは入っていません。全部百円玉、五十円玉、十円玉、ガサツと三千円をビニールの袋に入れて、「はい、三千円です」と持ってくるんです。はじめのうち、「このおばあちゃん、どうしちゃったんだろう。なんでこんな小銭ばかり持ってくるんだろう」と首をひねっていたが、あるとき私は気づいた。なるほど、おばあちゃんは一ヶ月かかってこの三千円のお金をつくっているな。それも今晚の五百円のおかずを買お

うと思うと、それを四百円にして百円玉をビニール袋へ入れる。バスで七十円とられるところを三つ駅ぐらいなら歩きましょう。その七十円を帰って来て、またこの袋に入れる。道を歩いていけば十円玉が一つぐらいは落ちてゐる。これも拾って袋に入れる。要は、お金を取られたという意識ではない。一ヵ月三十日の間に三千円のお金を自分の節約したなにかからつくりだしていく。これが素晴らしい布施行だ、こゝういう方は立派な人だから……。

「へエー。うちのおばあちゃんそんなことをやっていたんですか」というのは息子と嫁様だ。そのとき孫がせせり出た。女子大生の娘さんです。「そのとおりでございます」ときっぱり言いきった。そのおばあちゃんは脳をやられて倒れた。一種の植物人間になっていた。病院の救急病棟ですつとスヤスヤと眠るばかり。いくら声をかけても意識はない。家の者は必ず四時半から五時半までの一時間、交替でその救急病棟のおばあちゃんの横の様子を見にくる。その日の夕方は孫娘が当番に当たった。大学が終わって駅から病院に立ちよって枕元に座った。いつものようにおばあちゃんはまだスヤスヤと眠るばかり。何もすることはないから、ボヤツと枕元に座りながら、周りを見回したら、『浄土宗日常勤行集』という本が置いてあった。これはお経だな。チンプンカンプンで何だかわからない。

何の気なしに開いていくと、一番最後のところにカタカナでおばあちゃんの字が、「南無阿彌陀仏」「南無阿彌陀仏」「南無阿彌陀仏」と三回書いてある。これなら読める。それで彼女は「南無阿彌陀仏」とおばあちゃんもいまにうちのお仏壇のなかに入るんだなと思つて、「南無阿彌陀仏」「南無阿彌陀仏」と呟き始めた。

繰り返しているうちに、もう一人誰か「南無阿彌陀仏」と呟いている声が聞こえてきた。ハツと思つておばあちゃんの顔を見たら、目は閉じたままだけれども、口元が動いている。孫娘はすがりついていった。「おばあちゃんわかるの。私の声が聞こえたの」確かに間違いなく口元はニコツと微笑みを浮かべた。言葉は返してくれなかった。目もあけなかったけれども、間違いなく微笑んだ。孫娘はすぐお医者さん呼びに、「いま、うちのおばあちゃん意識を戻した」と告げにいった。お医者さんが来たときにはまたスヤスヤ眠っている。いまの状況をいくら説明してもお医者さんは、「そんなことはないですよ。このおばあちゃんは、もう意識は戻ることはないんですよ」と相手にしてくれない。孫娘はかたく信じている。あの瞬間には間違いなくおばあちゃんは意識を戻し、自分とはつきりと心と心の通い合いをしたんだ。そして、それから数日後にきょうのお通夜を迎えたわけでございますけれども、そういう立派な往生、最後をこのおばあちゃんは遂げて

いるんです。

たくさんのお通夜のお客がいる前で、十九か二十歳のこの娘さんが、堂々とこれを喋った。もう私は、「ああ、そうだろう。立派なこのおばあちゃんのお念仏の行は本当にここに実ったんだよ。いや、ありがたい話をしてくれた。とくに、あなたという一世代飛んだお孫さんに素晴らしい遺産を、このおばあちゃんは残してくれた」と。一昨日もこのおばあちゃんの年回を家の寺でやりました。真っ先に寺に駆けつけいるのは、このお孫さんでした。これがお念仏のありがたさだなと、しみじみ私も思ったこととございました。

お時間、ぼちぼちきたようでございます。私のきょうのお話、この辺で終わらせていただきます。大変、どうも失礼いたしました。

法然上人と御法語

三枝樹
隆
善

御法語について何かというようなことでございましたので、とりあえず「法然上人と御法語」というような題を掲げさせていただきました。まず、御法語というのは、一体何だろうかということから、辞書を引いてみました。皆さま方にこういうお話をするのは恐縮の至りでございますが、物ごとを進めていこうとすれば、初心からかかっていかなければ間違えるようなことになりはしないかと注意をしてみたわけでございます。もちろん、この「法」はダルマですから、仏陀が説かれた教えということになります。ここで法然上人という名詞を入れますと、「法然上人の教え」ということになってくるわけでございます。

そこで「語」というのがどのような意味をもっているのかというと、この「語」には、二つ、三つ意味があるようです。まず、語るとい言葉、語は、言語の語です。そして「話す」という意味がある。あるいは「述べる」という意味、あるいは「告げる」という意味がある。「告げる」ということになりますと、そこに「教える」、つまり「教訓」あるいは「諭す」という意味が出てくる。もう一つは節をつけて「朗読」する。なるほど、私は毎朝、お勤めのときに御法語を拝読させて、いただいております。拝読してるそのものが御法語でなければならぬというように気付くわけです。ですから、普通に申します

と、法語ですから、「法の語りかけ」、あるいは「法の言葉」、そのように受け止められます。けれども、節を付けて朗読する、拝読してるといふことになりますと、その拝読そのものが法語であるといふことになります。すると、非常に私にはありがたく拝読させていただくことができるという思われてきたわけです。あるとき、私は家内から、ある宗教雑誌に浄土宗の寺庭婦人会長でおられた故佐藤治子さん、(鎌倉の佐藤密雄先生の奥様)のことが紹介されていました。佐藤密雄先生が妻をしのぶというような意味で、ある宗教雑誌に一文を載せられておられたわけです。それを家内が読んでみなさいといふので、読ませていただいたんです。治子夫人は、お寺に生れ、父から、一番最初に授かったのが、法然上人の御法語であったそうです。いまは正統と二冊になっておりますけれども、戦前は合冊になっておりました。しかも一日から三十一日まで、一月間読めるように仕組まれている。夫人は、「おまえはお寺に生まれたんだから、まず法然上人の御法語を読みなさい」と言われて、毎日読まれたということ。佐藤先生の文は次のようにのべられています。「それがいまだに続いて、いつ読むかというとき、夕食が終ってから読む。それは家族が寄って夕食する。そうすると、夕食が済んでから、家内がこれを読みあげる。私たちはじいっと聞いている。そのじいっと聞いているといふことはどういう意味を持ってい

るかというところ、家内が読んでその声が法語となって声に表われて、私の体全身に伝わってくる。ですから、私は何にも言わずに、ただうつ向いていただいております。いただくよりほかはない」というようなことが述べられておったわけです。その後、ちょうど密雄先生と仏大でお会いできました、そのことについていろいろお話を承ったんですが、私は、その時に、初めて御法語というのは、いろいろ詮索するものではない。ただ読んで、ほんとにいただくというところに大きな意味があるのではないかということを感じて取らせていただいたわけです。ですから、単に法の言葉というのではなしに、読んだとたんに法語となって、語りかけてくださる。あるいはもう一つ、言葉を申しますと、仏の慈悲が読む声となって私に注がれるというような感じを受けるものが御法語ではないかと思っているわけです。

一口に御法語と申しましても、種類がたくさんあるようでございます。私たちは、知恩院版を『元祖大師御法語』としていただいております。御法語は、昭和十一年、いまの藤井御門主がお若いときに編集されて、『法然上人法語抄』という小さな冊子にまとめられたものがございます。これは、非常に都合よく編集されておると思います。それはさておきまして、私は、御法語というのは、単に言葉にこだわって解説すべきものではな

い。ほんとにいただくものであるということに気付かせていただきました。私はずっと以前に藤吉先生の『法然上人法語集』を頂戴いたしました。いただいたころは、あまり興味ないというとおかしいですけども、ついうっかり本棚の中へしまい込んでしまっておりました。今回、これはいっぺんどういうことをなさっておられるかと思っただけで、確かめてみたくて、その第一章に取り上げられておられる法然上人のお言葉が、「まことに大悲誓願の深広なること、たやすく詞をもてのぶべからず。心をとどめて思うべきなり」というものです。藤吉先生は、法然上人の言葉を三十篇ほど編集されておられますが、その第一番目に、このお言葉を引いて、そして順序よく三十篇を選んで一本となされておられるというのを見ましたときに、非常に私は感銘をいたしましたわけでございます。そのように私たちはややもすると法然上人が、こうおっしゃってる、ああ、おっしゃってるというようなことで、その言葉につられて、言葉をもて遊んで、それを説いてるようなことに陥っているんじゃないかと思えます。私自身が、考えてみましたときに、そのように思われてきます。念仏について「一念、十念で足りぬべし」あるいは六万、八万、申さなければいけないというようなお言葉があります。これは戒にしても、法然上人は、三学非器として戒を捨てられながらも、四十八願を頼んで、四十八軽戒を守るべしというようなお言葉がちょ

いちよい出てきて、これは一体どういうことだろうということになっていくわけです。それはあまりにも、私たちは法然上人のそういった言葉にこだわって、言葉をもて遊んでい
るんじゃないかとも受け止められることもできるわけでございます。

それなら、どのようにして受けるかというところ、やはり身を持って受けなければなら
ない、それと同時に法然上人のそういう一節の言葉というのは、前後があるわけです。た
だ、そこだけを押えておっしゃっているのではなしに、そこまでおっしゃられるには、前
の文があるということです。これに注意しなければならぬと思うわけです。一般的に御
法語と申しますと、ほとんど『勅修御伝』から、引用されております。皆、目次の中に
『勅伝』、『勅伝』と出ておりますので、後編は、『勅伝』ばかりではございませんけれど
も、前編は、皆『勅伝』からです。『勅伝』は何によって取られたかというところ、申すまで
もなく、望西楼了慧が編集いたしました、『黒谷上人語燈録』です。これは十五巻でした
か、その中に漢語と和語とに分け、あるいは、またあとで『拾遺黒谷上人語燈録』となっ
て、十五巻になってると思います。これも御承知のように望西楼了慧、三条派の道光と申
しますが、この道光が伝記を見ますと、法然上人のお言葉を何とか収録したいというよう
な希望で、小さいときから集め出して、そしてこのようなものを編集したというのがもとに

なっております。それと、もう一つは、親鸞写伝と言われております『西方指南抄』です。これは『黒谷上人語燈録』と重複した点がございませうけれども、親鸞が伝えたものでございませうので、真憑性はありますし、いささか趣の違った御法語が収録されております。ですから、ほんとに法然上人の言葉を理解しようとするならば、その前後を読んでみなければいけないのじゃないかと思ひます。ただ、ここにこの文がいいから短縮して一節を取りあげる。たとえば第一章は、『登山状』から取られておりますが、『登山状』のほんとの最初の一部分、序文の初めのほうの部分が一章として取り上げられておる。そうするとそのあと、どういふことを法然上人が主張されたかといったのかということ、やはりこれだけでは十分ではない。しかし、ただこれだけの文をもって、こうおっしゃってるといふようなことになりませうと、法然上人の真意を伝えていくことはむずかしいのではないかと、というふうにも思われてくるわけです。そういうふうにしてお説きくださる方は、全般にわたって、法然上人の思想信仰に近づいて触れていかなければ、この御法語が生きてこないというように思うわけです。これを説く場合、私はそのようにして、これは解説すべきものじゃない。ほんとに読んで、自分自身が受け止めていく、ただくよりほかはないんだというように考えております。いま藤吉先生が一番最初に引かれたのは『往生大要

鈔』の文です。藤吉先生の解説書の一番最初に引かれた御法語ですが、この第一章の中にも、私は、それに気付かしていただけの文があると思います。それはほとんどの方が、ここに御法語をお持ちですから、また暗記しておられると思いますけれども、「それ流浪三界のうち、いずれのさかいにおもむきてか、釈尊の出世に、会わざりし」、このことから、私は、そう思うんです。たとえば、三界です。三界とは何かというようなことになってきますと、これは欲界、色界、無色界、これは仏教学で、私たちはすぐわかりますけれども、一般の人が、これを読んで、三つの世界とは一体何だろうかと思えます。三界と言ったら、女は三界に家なし、坊さんもそうでしょうけれども、女性は三界に家なしということは一般に知れ渡ってるんです。だから、その三界、三つの世界が何であろうと、三界に家無しと言ったら、皆、ピンと感じとってるんです。そこなんです。一々説明する必要はない。三界に家なしと言ったら、この世の中に、私は家がないんだというふうに受け止めてるんです。私は、法然上人のお言葉は、それでいいんじゃないか。その実感です。いろいろ説明はいらない。解説は要らない。ほんとに三界に家なしという受け止め方で、自分自身が受け止めておかないと、人にはおそらくわかっていただけなのではないか。たとえば、私が三界、欲界、色界、無色界だ。欲の世界は人間の世界、色界も人間の

世界だ、無色界で、初めて天上界であるけれども、これは、やっぱり迷いの世界だと言うてもわかってもらえない。そういう感覚で、御法語というものを理解していただいて、いただくよりほかはない。これは佐藤密雄先生が、そのようにおっしゃったのです。「私は、いただくというよりほかはない」。このことを一生懸命おっしゃられたのです。「しかし、やはりお言葉の中には、仏教の用語もたくさん出てくるから、これは解説すべきであろう。家内にもそのような解説はいたしましたけれども、私は家内が読んでるのをそのままじいっといただいておる」とその姿が私は、ほんとに御法語を味わっておられる姿じゃないかと思えます。読んで、そのものが御法語でなければならぬように思うわけです。そういうところから考えていきますと、私は「法然上人と御法語」という題を出させていただいたのは、ただある人に送られた信仰上の御返事とか、消息とかそういうものだけが御法語ではないと思うんです。それは、石井教道先生の、勿論望月先生も『法然上人全集』を編集されておりますけれども、石井先生の目次をコピーにして持ってきておるんですが、法然上人の著述、著書はたくさんございます。たとえば『往生要集料簡』とか、『略料簡』とかあるいは『三部経大意』、そういう著書も私は法語と見て、読むということが大事であると思います。私自身も中国の浄土教をやっておりますと、日本

の浄土教は実際にわからないです。宗門におりますので、何とか宗門のことだけは、常識的に知っておかなければならないと思っておるんですけれども、法然上人の著述を、皆、読んだということはないです。『選択集』は仕方なしと言えませんが、よく読みましたけれども、たとえば『三部経釈』にしても、あるいは『往生要集』、『略料簡』にしても、自分の必要なところだけを読むだけです。これでは、ほんとの意味で、法然上人のおっしゃっておられることを理解することはむずかしいと思います。だから、御法語として受け止めてみようとするならば、いろんな法然上人の残された書物を読まなければならぬ。それが私の気持ちです。そのようにしますと、法然上人の多くの著述あるいは消息類というものがそのまま法然上人の御法語であり、法然上人の御法語として受け止めていかなければならないということになりますと、いっそう私たちは法然上人に近付いていくのではないかと思えます。もちろん『一枚起請文』の「ただ一向に念仏すべし」だけでけっこうだとは思いますが、その裏付けは何かというと、いろんな法然上人の消息や著述の中に裏付けがあるわけでありませう。そういうものを勉強さしていただきたいなどということから、単に限られた御法語という意味ではなくして、もっと広い意味で、「法然上人と御法語」をとらえてみたいというような気持ちで、このような題を出させていた

いているわけです。それにつきましては、もっと理論的に用意してお話ししなければならぬのですけれども、そういう余裕がありませんでしたので、第一章を味わいながら私の法然上人の法語を披瀝させていただきたいと思うわけでございます。

少し読みます。「それ流浪三界のうち、いずれのさかいにおもむきてか、釈尊の出世に、会わざりし。輪廻四生の、あいだ、いずれの生を、受けてか、如来の説法を、聞かざりし。華嚴開講の、むしろにも、交わらず、般若演説の座にも、つらならず。鷲峰説法の、にはにものぞまず、鶴林涅槃の、みぎりにも、いたらず。われ舎衛の三億の家にや、宿りけん。しらず地獄八熱の底にやすみけん。恥ずべし、恥ずべし。悲しむべし、悲しむべし」この第一章は二段に分かれておりますので、なんじととくご、会いがたくして会うことを得たりという法然上人の仏法にお会いになられた喜びが、『登山状』の序文になっておるわけでございます。それをどなたが編集されたか、よく知りませんけれども、知恩院版の中に一番最初に出されております。その中の前半を少し考えてみたいと思います。それは何でもありません。何でもありません。いま、読みましたように、如来の説法を聞かなかった、仏法に会うことができなかった、ほんとに「恥ずべし、恥ずべし、悲しむべし、悲しむべし」という単純なお言葉でありますけれども、私は、こ

れは非常に大きな法然上人の仏教に対する見識だと思ふんです。法然上人が、輪廻四生の間、いずれの生を受けてか、如来の説法を聞かなかつた、華嚴開講のむしろにもまじわらず、般若演説の座にもつらならず、鷲峰説法の庭にもぞまず、鶴林涅槃のみぎりにもいならず、スッスとおっしゃってこの順序を考えてみたときに、私はびっくりしたのです。これは御承知のように天台で仏教の經典が説かれたことの意味について、五時八教というようものを打ち出してありますが、それは五時にわけて、五つの經典を説かれたとおっしゃられてるんです。だから、まず華嚴時、阿含時、方等時、般若時、法華涅槃時、そういう順序があるわけです。お釈迦様の八万四千の法門の中には、そういう順序がある。その順序に従つて、法然上人は、華嚴開講から、鶴林涅槃で締め括つておられる。これをジッと伺わさせていただいたときに、法然上人の積尊に対する大きな敬虔とともに、仏教の理解がいかに深かつたかということが痛切に感じ取られてきました。もちろんその中から念仏の一行を選び取つておられるわけです。まず私たちは、華嚴開講から、『華嚴經』を説かれた時ということになります。と、浄土門では、これは三經一論五部九卷というので、そういう他の經典には目もくれないんです。私自身が実際に、もちろん三部經もそんなに深く入っておりませんけれども、他の經典ということになりますと、ほんと

に經典の名前ぐらいはわかりますけれども、読んだことはないんです。皆さま方の中で『華嚴經』をお読みになられた方がおられるかもしれないけれども、私自身は、浄土学というようなことをやっておりまして、『華嚴經』を読まない、そうすると『華嚴經』は一体どういことが説かれておるのかということのを法然上人は、華嚴開講のむしろにも交わらすという言葉の中に、おまえたちよ、どうか、この『華嚴經』をもういっぺん読んでくれとおっしゃってるんじゃないか。呼びかけておられるんじゃないかということがひしひしと伝わってきます。そうすると、これは『大藏經』をいっぺん広げてみなければならぬ。いまごろ、『大正大藏經』の漢文を読むのはむずかしいから、せめて和訳でも読んでみなければならぬということに気付かしていただくんです。そうすると私は、この『華嚴經』で、一つ疑問を持ったんです。華嚴とは一体何か、これはもちろんサンスクリットの原語がごいますが、中国語で、漢訳で華嚴と訳したのは、一体何だろう。華の厳かって何だろうと思うたんです。皆さん方、お考えになられたかどうか知りませんが、私はこの法然上人の御法語から『華嚴經』に近づかさせていただいた。そうすると『華嚴經』は御承知のように六十巻本、八十巻本、四十巻本があります膨大な經典です。まず、六十巻も八十巻もとうてい間に合わんから四十巻本を読んでみようと思うて読み出したん

です。そうすると、華嚴とは一体何だろうということを痛切に考えさせられました。そうすると中禅寺湖から流れ落ちる滝を華嚴の滝と呼んでいる。あれは何で華嚴の滝と付けたんだろう。それじゃいっぺん行ってみよう。実際に行ってみました。そうしますとエレベーターでおけると、広場があり、コンクリートで台が作ってありまして、そこから見るようになってます。そこに立っていると滝のしぶきが身にかかってくるんです。友だちを誘うていったもんですから、五、六人で行ったんです。皆、友だちはしぶきがくるものだから、「いやア」と言ってすぐ逃れたんです。けれども、私はそれを追及するために行ったものですから、濡れながらジーツと滝を見とったんです。だれが名付けたんだろうなと思う。やはり仏教の坊さんがつけたに違いないと考えておりました。じいっとその滝を見ると、滝というのは光なんです。あの光が美しいんです。光の美しさというのは、たとえば仏教では智慧です。智慧を光にとえる。華嚴は智慧なんだ、だからその智慧の美しさが滝の流の中から、光が発っせられておる。それで思わず知らず、だれか、坊さんが「華嚴」と思わず知らず、呼んだのが華嚴の滝と名付けられたのではないかな。この滝をどう名付けようというようなことではなしに、思わず知らず、美しさを見て「華嚴」とだれかが叫んだことによって華嚴の滝と名付けられたのではないか。そうなると智慧の輝き

を華嚴、華の麗しき、嚴かというような比喩的な言葉で、中国人が漢訳したのではないかな、とこう思うて、『華嚴經』をずうっと読み出しました。そうすると、なるほど『華嚴經』は、智慧を磨いてさとりを開くというところにあるわけです。『華嚴經』の主眼は、智慧を磨いてさとりを開く。それをこのような言葉で表わしておる。そのような気持ちで『華嚴經』をずうっと読んでいきますと、あれは何巻目でしたか、こういう言葉に触れたんです。あとで気付いたんですが、有名な句だそうです。「牛、水を飲めば、乳となる。蛇、水を飲めば毒となる。愚、学べば生死となり、知、学べば菩提となる」これについて何か釈尊は説明を加えてるのかなと思って、あとを読んでみますと、これきりで、すぐ別の文章になっていっている。説明ぐらい一つ加えてもらってもいいのではないかなと思えますけれども、加える必要がないんですね。そこに私は、釈尊が考えなさい、智慧を磨いていきなさいよと、いう教えが、ただ、この一句に盛り込まれておるように思われてならないわけです。これはほんとうに説明するまでもないと思います。水を牛が飲めば生命を育てる乳を作る。同じ水であっても、蛇が飲めば、生命を絶つ毒を作ってしまう。そしてそのあとに、愚、学べば生死となる。生死はもちろん迷いです。知、学べば菩提となる。菩提はさとりです。これだけで十分釈尊の意が通じているのではないかと思っただけです。

そういうことから考えてみますと、法然上人は、ただ浄土教のことだけを教えようとなさってはいなかったのではないか。言葉の上では「華嚴開講のむしろにも交わらず」と、ただおっしゃってるだけなんです。確かにいなかった、ただそれだけのことですけれども、それが法語となって受け止めたときに、私は『華嚴經』に接しなけりゃならないというように気付いたのです。するとおかげで『華嚴經』も少しは読ましていただけた。そうするとその次に、五時の区分からいきますと方等時が抜けますけれども、方等時は言うまでもなく、大乘仏典、その中には三部經が入っておるわけですから、これはわざと抜いておられることに気付くんです。そうすると第三番目に般若、『般若經』を説かれたという時期がやってくるんです。この般若も、やはり知恵なんです。そのようにしていきますと、『般若經』にも、少しは接することができる。それから、鷲峰説法の庭にも、ぞますとあります。鷲峰説法というのは、言うまでもなく靈鷲山です。耆闍崛山とも言われますが、釈尊は、靈鷲山で多くの法を説かれました。『觀經』もそうです。靈鷲山で説かれたと書いてある。ところが、この場合の鷲峰説法の庭にも、ぞますとすることは、經典を指す。この中では、一番の代表的經典は『法華經』です。そうすると、われわれ浄土門から『法華經』というものを眺めると、私自身は、日蓮に対して見たくもないような、經典に

思う。ですから、触れたこともなければ、見たこともなかった。ところが法然上人が、鷲峰説法の庭にもものぞまずとおっしゃってる。それをじいっと考えてみると、ほとんどの經典が、この靈鷲山で説かれておる。しかもその代表經典というと、どうしても『法華經』をあげざるを得ないんです。そうすると、そういう大事な經典を私たちは、何とはなしに毛嫌いして、触れなかった。ああ、これは悪かったなと思うたです。そして近付いていきますと、この『法華經』の中に、また『華嚴經』『般若經』の中にも阿弥陀仏に対する事柄は、書いておられるんです。御承知のように、皆、説かれています。大乘經典といわれる經典には、ほとんどの經典に、「たとえば阿弥陀仏の極樂世界のごとし」と、すばらしいことは、皆、それで押さえられておるんです。あらゆる經典にそういうことがちよこちよこつと出てきてます。ただ三部經だけが、浄土門の専門經典であって、ほかの經典に全然説いてないかというところじゃないのです。すばらしい世界、知恵を磨いた悟りの世界はちよど阿弥陀仏の極樂の世界のようなんだとたとえて説かれておるところがたくさん出てくるんです。そうすると、あらゆる經典で、釈尊は阿弥陀仏のことを説こうとされておられたに違いない。法然上人は、御承知のように、「釈尊の本懐は阿弥陀仏の本願を説くためであった、釈尊がこの世に生まれられたのは、阿弥陀仏の教えを説くために生まれた

んだ、随喜の法である」とすばっとやられております。そういうあらゆる經典に接していくと、それがほんとのように思います。法然上人は、単に我田引水されたわけではない。なるほど釈尊のお心はそういうところへ持っていこうとして、いままでいろんなことを説いてこられたんだな、というようなことを実感させていただく。そういうときに教えが本物となって出てくるのではないかと思えます。この『法華経』をずうっと読んでおりましたときに、『東方界』という雑誌に歌の説明の項目が一ページほどありました。たまたま見ておりましたら、『法華経』のいわゆる寿量品です。『法華経』の寿量品の精神を謳ったんです。『法華経』の寿量品というのは、釈尊の入滅を非常に詳しく解き明かしたものです。お釈迦さまが亡くなると仏弟子は、皆非常に悲しんでる。「悲しみを書き尽くしけり涅槃図」と言われてるように、これ以上の悲しみが無いというほどの悲しみをかもし出してきているわけです。そこで仏弟子たちはどうなるかというところ、やはり釈尊の常住性です。釈尊は、決して亡くなっているんじゃないんだということが思想化され大乘經典が生まれてくるわけです。釈尊の生命は永遠であるということを強調したのが寿量品です。その寿量品の精神を謳ったのが、法然上人より十五歳ぐらい先輩になる、円位法師です。西行とも言うんです。これは参考になるかどうか分かりませんが、『千載集』の巻十九に

載っておりますが、「鷲の山、月入りぬと見る人は、暗きに迷う心なりけり」これも解説は、皆さま方には不要だと思えます。鷲の山は、言うまでもなく靈鷲山を指している。月入りぬということは、月を釈尊にたとえて、釈尊が亡くなった。ここで常に説法せられておられたけれども、釈尊はなくなってしまったのだと見る人は、暗きに迷う心なり。これはほんとに寿量品を読んではじめて、私もこの歌に接して、なるほど西行は寿量品の精神をこの一句におさめてるということに気付かしていただいたのです。そうしますとこの歌がどう響いてくるかというと、私は法然上人の「月かげのいたらぬさとはなけれどもながむる人のこころにぞすむ」この精神はこれにつながってきていると思います。

どうぞあとでじっくりお考え願いたいと思います。この歌と月かげの歌との関連性に、私は気づいたのです。ですから、法然上人は、われわれに何を教えようとされているのか。もっと広く仏教というものを見きわめて、浄土教が仏教の中の仏教でなければならぬということをお教えられると、私は感じ取らざるを得ないようになってきたのです。浄土教は、仏教の中の一点、一画ではなしに、仏教という大きなものの中の一つの宗派ということではなしに、その宗はむねですから、浄土教によって、浄土教こそ仏教でなければならぬ。浄土教の仏教なんだ。仏教の中の一画ではないというような見方が成り立つ

てこなければならぬ。そういうことから宗学上、三部経を通じて『大蔵経』を見る。『大蔵経』の中の三部経ではなくて、三部経を通して大蔵経を見るといふような生き方が、いままでの宗学の生き方であつたらうと思います。やはりそういうことに気付いて、念仏の教えが、ほんとに自信を持って説かれていかなければならないのではないかとということに気付かしていただいたのです。

それと鶴林涅槃です。鶴林、御承知のように、お釈迦さまが亡くなられた場所を指しておるわけです。この『涅槃経』については、私は、少しは前から善導大師の教学との関係がありましたので、何回か読ませていただいておつたわけです。しかし涅槃には小乗經典があるんです。小乗の涅槃と大乘の涅槃がある。そこでどう違うかということ、小乗の涅槃は釈尊がお生れになられて八相成道される。そういう成道をされて法を説かれて、亡くなるまでのことに重点を置いて説かれたのが、小乗の涅槃経です。大乘の『涅槃経』はどうなるかということ、入滅後、涅槃後のことについて強調したのが、大乘の涅槃経となつて特色を持つておるといふことにも気付かせていただいたのです。そうすることにおいて、大乘經典が、先ほど書きましたように、釈尊の常住性、永遠の生命の中に生きておられるんだという考え、思想的な展開というものが大乘經典の『涅槃経』の特色でもあるということ

とに気付かせていただいた。そして漢訳經典をずうっとそのつもりで注意深く読んでいきますと、たとえばニルバーナは、御承知のように動詞の変化と書いて、滅するとか、吹き消した状態ということが言われております。けれども、訳では、大体このような順序で、最初は釈尊の肉体が亡くなったという意味にとらえておる。それを入滅ということばで中国人は漢訳しておるようです。ところが、先ほど申しましたように、釈尊の入滅を悲しんでばかりおられない。何とか法を生かしていかなければいけない。法を生かすには仏の常住性を説かなければならないという思想的な展開のもとに、滅度となっており、それから寂滅あるいは円寂というように經典の翻訳の順序をずうっと見てみますと、漢訳經典がこういうことばに変わってきているということに注目したいわけです。このごろは、涅槃というたらさとりだ、さとりの世界、さとりそのものと、私たち、頭の中で思っています。涅槃とは何かというと、たいがいの人が悟りの世界、さとりそのものだとおっしゃると思います。ところが、それに至るまでには、やはり釈尊の常住性を説こうとして成立したのが、大乘の『涅槃経』なんです。いまでは涅槃は、さとりの世界、だからこそ有餘涅槃とか、無餘涅槃というような解釈が出てくるわけです。

こういうことから考えてみましても、法然上人がわれわれに何を教えておられるのか。

言葉の上では、そこにいなかったというだけですまされるものであろうかどうかです。ひとつお考え願いたいなど、私自身が思っていたものですから、この涅槃については、私ももっと実感した話を持つてゐるんですけれども、時間がまいりましたので、留めさせていただきます。

私が「法然上人と御法語」と題させていただいたのは、そういう法然上人御法語というものをもっと大きなものである。言葉をもて遊んでいっては法然上人のほんとの真意は汲めないのじゃないか。あるいはまた、その言葉がいかに私たちに示唆を与えてるかということを含みとるには、これはいただくよりほかはないのではないか。こう思うわけでございます。たいへん整わない話で申しわけございませんでしたけれども、終らせていただきます。

あとがき

浄土宗布教研究所、昭和六十三年の月例研究会は、「御法語に学ぶ」というテーマのもとにす
めてきましたが、その報告をかねて布教資料第三集としてまとめました。

大本山光明寺法主、藤吉慈海台下には「御法語に学ぶ」と題して、十二月の集中研究会にご講義
いただきました。（昭和六十三年十二月）

大室了皓氏は、大本山増上寺教務部長であり日頃の教化活動を通して、「今、何を語ろうとされ
ているのか」と題してお話いただきました。なお氏は御法語抄『浄土への道』を刊行されていま
す。（昭和六十三年五月）

大橋俊雄氏は、日本文化研究所講師、神奈川教区西林寺住職であり、「学問と修行」と題してお
話いただきました。（昭和六十三年十月）

寺内大吉氏は、浄土宗東京事務所長、宗会議員、作家等と幅広く活躍されております。今回は
『徒然草』と法然上人」と題してご講義いただきました。（昭和六十三年十一月）

三枝樹隆善氏は、仏教大学助教授、布教研究所主任であり、十二月の集中研究会の折、「法然上
人と御法語」と題してご講義いただきました。（昭和六十三年十二月）

編集後記

今回この出版に際し心掛けたのは如何にして出版物のコストをおさえるかであった。

O A化の試みとして速記会社に月例研究会、集中研究会における講録を、ワードプロセッサを使用してテープをおこして頂き、そのデータをいれたディスクをプリントと共に依頼した。さらに研究所にあるコンピュータ（NEC9801）使えるようにMS-DOSのテキストファイルにコンバートし、コンピュータのワードプロセッサにより校正を行ない、印刷所にそのデータをIPS（インテグレートッド・パブリッシング・システム）（IPSとは割付、版下作成、印刷までをコンピュータで実現する総合印刷システムである。）で取り込むようにお願いした。

その結果、研究所関係の布教シリーズ、研究所報第六号に掲載された特別講演、昭和六十三年度教学布教大会意見発表も同じ方法で編集が行なわれ、頁あたり二割強のコストダウンを実現することができた。御協力頂いた、中根式速記協会（東京九段）、ヨシダ印刷（布教シリーズ）、共立印刷（研究所報）の関係者に厚く感謝する次第である。

御法語に学ぶ

布教資料第3集

平成元年5月28日

編集・発行 浄土宗布教研究所
〒105 東京都港区芝公園4-7-4
明照会館内

印刷 ヨシダ印刷株式会社

